

30  
437

# 讀史感

吉田勿來著



昔は頼山陽、詠史を好みて、詠物を好まず。曰く史中  
自ら無数の好題目あり。以て人の情懷を暢叙するに  
りあり、何んを必らずしも謎語的の詠物に取らんや  
是れ通論にあらざるも、復た一種の活眼識ありと謂  
可し。

友人吉田勿來君、好んで史を讀み、且つ史を談す。其  
の談するや、往々新見あり。若し悉く傍人を首肯せし  
むる能はざる者ありとすも、必らず多少の諷示、暗  
指を刺戟せずんばあらず。

君頃る其の近業を集め、題して「讀史感」と云ふ、而し

中 28  
餘 7  
明 39  
内交



二  
て一言を予に徴す。予平生君と机案を接し。小閒を得る毎に、往々君の談友たるの愉快を専らにす。而して君が問題の解決者たると共に、其の問題提供者として、予を起すものあるは、予が恒に認識する所也。乃ち予が経験を以てするも、此書が讀者の感興に訴ふる所の、決して鮮少なからざるを信する也。

明治三十九年五月初七

於國民新聞社編輯局

蘇 峰 學 人

### 自題

鬱勃胸中欲語誰。枉將心血托文辭。洛陽才子慨時淚。夔府老人憂國詩。落落乾坤十年夢。茫茫今古一枰棋。半宵剔燭坐蓬屋。獨聽瀟々雨灑帷。

不須椽筆捲風雲。辭達而休是至文。魯論一篇王道貴。葩經六義性情分。中年夙有讀書癖。半世終無經國勳。回首唐虞千古遠。哲人遺墨到今芬。

丙午仲春

勿來處士



文周孔孟。班馬左莊。葛陸范馬。周程朱張。韓柳歐曾。李  
杜蘇黃。許鄭杜馬。顧秦姚王。世有二人。俎豆馨香。臨之  
在上。實之在傍。  
(晉國藩)

To me a glorious court, where

hourly I converse with the

old sages and philosophers

—Fletcher

### 例言

- 一 著者、史學研鑽の餘、折に觸れ、事に感ずる毎に、之れを記述して、大方博雅の一槩に供したりき、斷章零篇、固より論ずるに足らず、雖も、鷄肋自ら棄て難きの感あり、幸ひ嵩山房主人の厚意に依りて、最近に成るもの數種を蒐錄して本書を成せり。
- 一 文、史を主として人物を説きたるものあり、人物を主として史に及ひたるものあり、錯綜一ならざるも、要は世變を觀するに在り。
- 一 史は治亂興亡の鑑也。眇たる一小冊子、幸ひに史家



の参考と爲り、國民の發奮劑たるを得ば、望外の幸也。

六

著者識

### 讀史感目次

丁數

#### 漢武帝の雄圖

(東西兩人種接觸の始元)

一

秦漢と匈奴——武帝と博望侯張騫——所謂西域諸國——漢烏の同盟——漢武帝の遠征——匈奴の屏息——漢人種と異人種との衝突

#### 讀孔子論

(春秋時代の思想界)

二四

孔子に關する三著書——三書の價值——孔子は人也——林料論——孔子と老莊哲學——孔子の政治論——學者としての孔子——孔子の本領——孔子論の特色

#### 清朝匪亂の片影

(洪秀全の謀反)

五二

長髮賊の首魁——南清の一王——また一世の雄

#### 明末亂離の史片

(讀積善錄序)

六一

孟學の人物——國家廢滅の時運——弊世の一大文字

#### 蒙古來

(國威宣揚史の二頁)

七〇

大危難——大帝國——大決心——大襲來——大快事

#### 足利と豊臣との外交

(國民對外の教訓)

九五

義滿の卑屈——快男兒秀吉

#### 天正年間奥羽史の片影

(相馬義胤の一生)

一〇三



外天欄——白河關外の形勢——問罪の師——伊達相馬の調停策——相馬隆胤の自刎——三ヶ條の訓誡

問宮林藏 (邊疆探検者の一生)……………一六五

少年時代——夷域探險——樺太島の測定

幕末の一奇僧 (靜慮庵慈隆師)……………一七八

東奥の偉人物——勤王論

王學者の生涯 (活學問の運命)……………一七九

近江聖人——王學者の意氣——熊澤蕃山——社會黨の巨魁——西郷南洲——謀反人養成科

戦争と武器 (兵學者の資料)……………二〇六

勝敗の歌——上古に於ける例證——武器の威力

新元會 (日本陽曆の濫觴)……………二二七

覺神の會合——阿闍陀正月——新文明の鼓吹

隨感隨錄……………二三六

封建制度と國家的思想——南北人種の競争——悲絶慘絶の文字——孫子と吳子  
文化三年日露交渉の序幕

目次終

讀史感

吉田勿來著

漢武帝の雄圖

……………東西兩人種接觸の始元……………

(一) 秦漢と匈奴

漢の武帝の雄圖は、支那四千載の歴史に於て、偉なる光輝を發揮するものの一也。彼は不世出の英才を内治の整頓に用ひたるのみならず、其の雄略を西域經營に用ひたり。而して其の經營に於て端なくも東西兩人種の接觸する始元を開きたるが如きは、書契あつてより以來會つて有らざる處、吾人が三千年の昔に在つて、此の壯絶なる



事故を支那史上に於て發見し得るは、洵に珍とすべきにあらずや。周室衰へ、群雄割據したる春秋戰國時代に在ては、支那國民の大半は、孰も其の自家獨立の經營に忙はしうして、曾て眼を崑崙山外に馳せざりき。獨り趙は其の居る處匈奴に接したるが爲に、邊境常に彼等の侵寇を受け、對外の氣焰は其の民に熾なりき。名將李牧は訓練したる兵騎を以て、屢々其の侵犯を退け、敢て南下の勢力を逞うする能はざらしめなき。秦の始皇天下を一統するに方りて、始めて匈奴の勢力が強大なるを看取し、國家の運命は、此の北方人種の爲めに制せらるゝに至らんを恐れ、防禦と掃蕩とに國民の全力を擧げ萬里の長城は築かれたり。蒙恬三十萬の精兵は、塞外に暴露されたり。史家は『亡秦者胡』との豫言を以て、胡亥の暗愚、國を失ふに附會したりと雖も、是れ徒らに成敗の跡を揣摩して附會したるに過ぎず、

識 史 感

當時に於ける情形を案するに、秦を亡ぼすものは正しく北方蠻人にして、形勢を洞察したる先見の士か、國民に興へたる警告と知らずや。其の輕々しく南下せざりし所以のものは、秦早くも自覺して之れか防禦に力を悉したると、匈奴も亦た其の全力を擧げて、南下し得ざりし事情ありたるか爲也。若し此の時代に於て冒頓單子の起るあらんには、萬里何の用をかなさん、秦をして神符の豫言を實現せしめたるも亦た知る可からず。漢初に當りて匈奴に一大豪傑起りぬ。冒頓單子と云ふ。彼れの自立して匈奴の單子となるや、雷轟電撃、東の方東胡王を襲ひ、西の方月支を撃ち、南の方樓煩、白羊を并せ、猛然として南下し、秦の蒙恬が奪ひたる匈奴の故地を復し、北夷を服従して、南の方諸夏と敵國と爲り、左右賢王、左右谷蠡、左右大將を置き、左王將は東方直上谷に居り、直

識 史 感



に東方濊貊、朝鮮に接し、右王將は西方直上郡に居り以て西、氐羌に接す。而して單于庭は雲中に在つて全部を總統せり。此の時に當りて萬里の長城は既に彼れの掌中にありて、匈奴を防がんとして築かれたる塙障は、却て匈奴が南下の踏臺となり終んぬ。漢高天下を平定し、「大風起兮雲飛揚、威加海内兮還故郷」と豪歌したるも、忽ち彼が國家の、存立を危うすべき大敵を見出し、三十萬の衆を率ゐて、之が掃蕩に従ひたるも、却て彼が四十萬の精銳の爲に白登に窘感せられ、陳平が奇計を用ひ、閼氏(單于の妻)に賂ふて僅に免れ、このを得たり。此の時よりして北人南下の勢は、駭々として漢の國境を歴し、高祖より五代、景帝の世に至るまで、漢室は常に對外政策に困躓し、其の影響は内政に及ぼして、國歩の艱難を致し賈誼の治安策となり、晁錯が自強策となりて、第六代武帝の時代に至れり。

(二) 武帝と博望侯張騫

武帝は漢土の帝王たる位に即けり(西曆前一四〇年)彼れは支那歴代に於いて多く有らざる、稀れに見る處の、英武の姿を備へたる帝王なりき。秦より以降、漢土に王たる者が、屢々匈奴の爲めに侵寇を受け、屈辱を敢てし、國勢の日に困躓するを見て、慨然一舉、塞外經略の大業を建て、對外の勢威を伸張せんと欲したりき。時に匈奴の降るもの言へらく、「匈奴、月氏の王を破り、其の頭を以て飲器となし、月氏遁て匈奴を怨み、其仇を報んと欲す」と。武帝は之れを聞いて思へらく、月氏既に此の如くならば、之れと通じて以て匈奴を撃つに如かずと、彼れは漢、月同盟を思ひ立ちたる也。然れども月氏に通ずるは、夫れ猶ほ空を鑿つか如きのみ。葱嶺以西の地勢は、未



だ漢人の目に明かならず、此の不知案内の西域に向つて、交通を開  
 始せんとすること容易の業にあらず、況んや之れが通路は匈奴の領  
 地なるをや。是に於てか武帝は、詔を下して其の使たるべきものを  
 求めぬ。募りに應じたるものは、漢中の人張氏名は騫。彼れは此の  
 至難なる使事に當り、月氏に通せんが爲めに、堂邑氏の奴甘父と云  
 ふものと共に隴西を出でにき。彼れは路、匈奴の地を過ぐに於いて  
 端なくも匈奴の捕ふる處となり、彼れは傳されて單干を見ることが  
 得たり。單干彼れに語りて曰く「月氏は吾が北に在り、漢何を以てか  
 往いて使用するを得べき、吾れ越に使せんと欲す、漢肯へて我に聽か  
 んや」と。騫は遂に匈奴の爲めに抑留せられ、十餘年の間、空しく穹  
 廬の中に送り、妻を娶り、子を生む。而かも彼れは、漢の使たるこ  
 とは一日も忘れざる也。既にして間を得、其の屬と共に逃走して西

に向ひ、數十日を経て大宛に至る。大宛は漢の富强なるを開き、既  
 に通せんとするの意ありしも、匈奴の其の路を梗塞するを以て志を  
 得ず、騫の至るに及び、王其の行かんと欲する處を問ひぬ。騫は告  
 ぐるに月氏に通するが爲めに來りしを以てし、且つ曰く「惟王、人を  
 して我を送らしめよ、誠に至るを得ば、漢に反るの後、財物を賂遣  
 する勝て言ふ可からずと。大宛王之れを聞いて大に喜び、通譯者を  
 附して康居に抵り、大月氏に傳致せり。然れども此の時、大月氏の  
 王已に胡の殺す處となりて、其の夫人王となり、大夏を臣として之  
 れに君臨し、土地肥饒にして、國境靜寧、また外國と交通するの意  
 なし。騫は留まること歳餘、遂に要領を得ずして歸途に就き、復た  
 匈奴の捕ふる處となりて、歳餘を費やし、漢を出で、より十三年、  
 初めて武帝に謁することを得たり。



八  
彼れは其の使事たる大目的を達せずして歸來せりと雖も、彼れが見  
聞したる西域の事情が、如何に武帝の雄心をして、益々西域經略の  
熱度を高めしめたる乎。且つ彼れ以前に在つて、葱嶺以西の諸國が  
夢の如く、幻の如く、漢人の目に映じたるものが、彼れが見聞の報  
告と共にいとも明白となれり。氷層矗立の原野、雪雲莽蒼の沙漠の  
彼れが眼中に映じたると同時に、奇草異木の、當時東方人種の見得  
ざりしものが、是れよりして詩人の資料となるに至りぬ。

(三) 所謂西域諸國

張騫使事を終りて歸來したる後、葱嶺以西の諸國にして彩色せられ  
漢代の輿地圖に一段の興味を添へたるは、實に左の諸國なりき。

大宛 現今のトルコスタン

康居 同  
月氏 同  
大夏 現今のアフガニスタン地方  
烏孫 現今の伊犁地方  
烏弋山離 現今のアフガニスタンとヘルシヤとの間  
安息 現今のペルシヤ及びペルチスタン地方  
罽賓 現今の印度の北方カシメル地方  
奄察 露領裏海の北邊  
條支 ヘルシヤとアラビヤとの間  
身毒 印度

以上は是れ漢代に於ける西域諸國の位地也。而して張騫の身自ら其  
の地を踏みたるは、大宛、康居、月氏、大夏、烏孫の諸國にして、



十  
他は其の部使を遣はして交通し、若くは其の國土民情を偵聞したるもの也。

此等の諸國、春秋戰國時代より、秦漢に至るの間、其の盛衰興亡一ならず。初め大月氏は河西の地を領有して勢威甚だ振ひぬ。匈奴の豪傑冒頓單于の起るや、屢々之れと兵を交へ、遂に敗績して餘衆西走し、伊犁地方を領略し、再び國を建てたるも、又た烏孫の破る處と爲り、遂に南移して大夏に入り、三たび大月氏國を建てにき。更に此等の諸國の人民を種族上より見るときは、烏孫はセミチツク種にして、曾つてはバビロンに黄金時代を造り、榮華の夢に一時的快樂を貪りたるもの、秦の天下を一統せる時代に在つては、猶ほ天山の西バルカシユ湖一帶の地を掩有して、一國を爲し、大夏及び大宛は、即ちアリアン種にして、曾ては希臘に一大文化の花園を開拓

し、華實を後代に遺したる種族なりき。此時代に於いて此の地方は大小其の國土を異にすと雖も、皆な是れセミチツクとアリアンとの兩人種が、交互錯綜したるものにして、此の間に突如として張騫なる支那人種が、空を鑿ちて至る、豈に史上的一大奇觀にあらずや。猶ほ一步を進めて當時の史を案じ、興亡の跡を探討すれば、彼の偉略一世を籠蓋したる、マセドニアの帝王たる亞歷山が、文明を以て裝飾されたる希臘を征服し、威勢隆旺として東方に雄視したりしペルシヤを討滅し、向ふ處敵なく、忽ちにしてマセドニヤなる大帝國を建立し西曆前三二七年遠く印度に向つて其の干戈を用ゆるに至りぬ。而かも如何に大豪傑も、天の命には敵する能はずして、遂に其の長大の身をバビロンの城中に横へ、封土玆に分裂して復た收拾すべからず、國勢大に衰ひ、其の後、部將の自立してシリヤに王と稱



十二  
 するものあり、一夜に作り出したる榮華の黄金甌は、空しく秋風荒涼の間に埋却さるゝに至りぬ。

他方に於ては、新興の羅馬國、地中海岸に雄視すべき萌芽を現はし、曾つてハンニバルの爲めに焦土に化せられんとしつる都府を回復し、西班牙を征服し、マセドニヤを伐ち、勢威大に地中海岸に振ひ、後にはマセドニヤを滅し、カルセージを殲し、希臘を降し、歐洲の大半は已に彼れが羈絆の裏に屬し終んぬ。是れ實に漢武の即位に先つ四年なりき。(西曆前一四四年)西域に於ける形勢此の如くにして羅馬が日に強大なる壓力を四方に加へつゝあるに、東方に於ては彼の冒頓單于が盛に四方を攻伐し、弱者は遂に其の呑嚙を免るゝこと能はざりき。左れば其の間に國する小弱者は、宛然盤石の間に介立したる卵子の如く、其の危きこと岌々乎たり、全く亡びざるものまた幸

也。

(四) 漢、烏の同盟

武帝の張騫をして西域に使せしめたる所以のものは、月氏と攻守同盟を訂結して、以て彼の匈奴單于か、南下の勢力を阻止せんと欲せる也。然るに其の目的としたりし月氏は、他の邦國の爲めに亡滅し爲めに其の志を達する能はざりしと雖も、而かも尙ほ月氏の外に、同盟すべき邦國なきにしもあらず。事情を知悉せる張騫は、烏孫部屬に結んで以て、匈奴の右臂を斷せんことを建言せり。然り、其の目的とせる國を異にすと雖も、目的とすべき事を成すに於て、異なる處なきを以て、漢武は烏孫と同盟するに決せり。而して其の同盟は如何なる方法によりしが、漢は先づ金幣を以て其の意を示し、烏



孫は其の産する處の名馬數十匹を献じて以て之れに酬い、是よりして漢と烏孫とは、交通を開始して、同盟を訂結するに至り、元封元年(西暦前一〇年)には、烏孫王昆莫漢の公主を得て、以て昆弟たらんことを要求し來りぬ。婚姻を以て同盟の紐帶を堅うせんと欲するは、其の親を示すに於て好箇の手段なりと雖も、漢人として禽獸視したる西夷と兄弟たらんとす、實に是れ漢の榮辱に關する一大重事、豈に輕々しく決定すべきものならんや。群臣會議は開かれぬ。婚姻問題は諮問されぬ。其の結果や如何。國家の運命に關しては、婚姻亦た已む能はずとの理由を以て群臣の議は決せられぬ。憐れむべし其の胡地に嫁せらるべき公主は誰れぞ。江都國王建女は、此の悲しむべき犠牲となり、國際和約の贈遺として、胡王に嫁くべく命せられぬ。彼女の頸には、白珠を以て飾られたる紐は懸りぬ。黄金色の綬帶は、

彼女の細腰に纏はれぬ。而して彼女は畫かれたる駟車に乗じて、幾久しくも住みなれたる漢宮の春色を後になし、被髪左衽と卑しめたる、醜の國へと旅立ちぬ。彼女の旅は、來ん春に長安の花を再び見つべき望みなき、永久歸らざる旅なりき。彼女の烏孫に著するや、直ちに其の居室を治め、器具を備へ、身は漢宮に在るに似たりと雖も、心は南飛の雁を追ふを如何せん。彼女は終に穹廬の月に一曲の琵琶を弾じて、漢宮に侍するの往時を回想せざるを得ざりき。彼女の夫たるべき昆莫は既に老いぬ、彼れ豈に悲しまざらんや、自ら歌を作りて曰く、

吾家嫁我分天一方。遠托異國兮烏孫王。穹廬爲室兮旃爲牆。以肉爲食兮酪爲漿。居常土思兮心内傷。願爲黃鵠兮歸故鄉。女兒腔裏の愁緒綿綿語り來りて、悽惻人を動かす。嗚呼漢武の雄圖



十六  
も、詮し來れば織細の一美人に待つ處甚だ多し、美人英雄は遂に是れ史上の點彩なるべき乎。

(五) 漢武の遠征

漢武の張騫が策を用ひて、漢、烏の同盟を訂結したるは、彼の蒸蒸として南下の勢を逞うする、匈奴の勢力を殺がんが爲めに出でたるものなりと雖も、彼れは漢の威武をして塞外に振はしめんとしたるもの、仔細に彼れが胸臆を尋釋したらんには、單に匈奴を掃攘し去るのみならず、四海を統一して、悉く漢の正朔を奉せしめんと欲したるは疑もなき事實也。故に彼れは一方に於いて、此の同盟の策を取ると同時に、他方に於いては、國力の有らん限りを悉して匈奴討伐の大軍を起したり。乃ち元狩二年(西曆前一二一年)には、霍去病を

以て票騎將軍となし、以て匈奴を伐たしむ。霍去病一萬騎を率ゐ、隴西より出で、匈奴に向ひ、焉支山(陝西に在り)を過ぎ、轉戦大に勝を得、深く匈奴の地に入りて祁連山(天山)に達す。此の秋匈奴の渾邪王、單于と快からず、書を漢に致して降らんことを乞ふ。漢武乃ち五屬國を置いて其の衆を統べ、四年には、大將軍衛青、票騎將軍霍去病をして、各々五萬騎に將として、懸軍萬里、匈奴を伐たしむ。衛青能く戦ひ、去病深く侵入して、狼居胥山に達し、瀚海に臨み、武威を匈奴に示しぬ。斯くして匈奴は其の地を守る能はず、遠く塞北に遁れ去りて、蒙古大漠の南にまた王庭を見る無し。然れども漢の失ふ處また少からず、邊に兩軍出征するに當つて、官私の匹馬を闕したるに、其の數十四萬匹と註せられぬ。而して復た塞に入るもの三萬匹に満たず、匈奴の兵八九萬を殺戮したりと云ふも、而かも



漢の失ふ處亦た數萬、其の征戰の如何に困難なりしかは、後の史を讀むものをして想像に堪へざらしむ。

元封元年(西曆前一〇年)には、漢武自から長城を出で、單于臺に登り、兵を勅して武威を示し、同三年には樓蘭を撃ち、車師を破り、太初二年には將軍李廣利大宛を撃ち、大宛遂に漢に歸服す。是を以て西域諸國大に震慄す。其後蘇武が使節を奉じて、北海の氷雪裏に困苦を嘗め、李陵の一軍覆没して、匈奴に降るの慘劇ありしと雖も、而かも匈奴をして漢の威武に震恐せしめ、漠南遂に王庭なく、周末より秦代に至るまでの間、侵犯に困頓したる外敵を掃ひ、國家存立の基を固うしたる者、是れ豈に漢武の功にあらざるなきを得んや。惜むらくは彼れ早くも功名の念に飽き、巫蠱を信じて方士に聽き、神仙を求めて秦皇の轍を踏まんとし、大に雄を西域諸國に示して、

大陸混一の功業を爲す能はざりしことを。

(六) 匈奴の屏息

漢武は此の如くにして、其の華やかなる一生を了したりと雖も、漢、烏の同盟は猶ほ従前の親睦を以て繼續せられたり。

宣帝の時に至り、烏孫に在る公主及び昆彌(昆莫の子)は、共に書を送り、曰く、匈奴大に兵を發して烏孫を侵撃し、車延、惡師を取り、漢、烏孫と隔絶せしめんことを謀れり。昆彌願くは國中の精兵を發し、自ら人馬五萬騎を給し、力を盡して匈奴を撃たん、惟々天子兵を出して、公主及び昆彌を救ふ處あれど。宣帝此の書を得るや、直に議して兵を發する十五萬騎、之を統ふるに五將軍を以てし、道を分ちて進發す、別に校尉常惠をして、漢の節を持って烏孫の兵を護



らしめぬ。昆彌自ら五萬騎に將として、西方より匈奴の右谷蠡の王庭に入り、大に之を破る。是れよりして漢は南より、烏孫は西より匈奴の地を侵し、匈奴をして遂に漠北に屏息せしむるに至りぬ。匈奴は此の如く漢烏同盟の爲めに、曾て冒頓單于が擴張したりし地を削減せられたるのみならず、五單于孰れも其の統督者たらんとして、相争ひたるの結果は、皆な自立して一方の地を領し、相攻伐するに至りて、其の勢は漸次に衰殘に歸するのみ。是より以後、また南下の勢を以て、漢を劫す能はざるに至れり。是れ豈に張博望の建策機宜に適し、漢武の雄略、能く其の功を收めたるにあらざるなきを得んや。

(七) 漢人種と異人種との衝突

漢武の雄圖は、漢武自身の功名心を満足せんが爲めに、企たてられたるが如しと雖も、其の實は漢人種と異人種との衝突也、即ち人種と人種との争也。

漢人種は早く已に黄河及び楊子江の流域に繁殖し、月を重ね、年を追ふて一大民族と爲り、以て九州に瀰漫したり。然れども之れを結束して一大國民たるの資格を具備せしむるの英雄は出でざりき。秦の始皇に至りて、稍々其の統一を示したりと雖ども、大業また半ならずして歿し、之れを受くるに二世の不肖を以てし、却て國民離叛の端を開けり。秦に代りて統一を試みたるは漢高なりき。異人種たる匈奴亦た、彼の蒙古大漠の南北に繁殖瀰漫し、各々部落を異にして統一せず、互に相攻伐したるは、實に支那に於ける唐虞の時代よりなりき。冒頓單于の起るに及んで、此の離散したる部落



威 史 識

を討伐し、併合し、結束統一して一大國民とはなりぬ。而して彼れは其の異種なる漢人を征服せんと試みたり。是に於てか漢人種に對外の敵愾心は勃然として起れり。斯くして漢武に至り、此の敵愾心を利し、漢人種の一團を提げて、異種なる匈奴を掃攘せんとしたるものにして、異人種が各自膨脹の結果、遂に衝突するに至れる也。然れども漢武の雄圖は、既に言へるが如く、獨り匈奴を掃攘したるのみにして飽かんと欲するものにあらず、彼れは實に西城經路を以て其の大なる目的と爲したり。故に彼れは張博望の奏によりて、西南夷に通せんとし、印度に通せんさせり。彼れは漢人種の勢力を、大陸隨處に扶植せんと思念を有したるは、疑ひもなき事實也。若し史的想像を逞うして、漢武が其の思念とする處を成功せしめなば、如何なる結果を當時の史上に留む可き乎。西に在ては羅馬の最

威 史 識

盛時代にして、南征北伐、殆んど服さざるの國なく、境土を接するの邦國は、皆な其の足下に跪拜したり。東に在ては漢武、一團の黃人種を提げて之れに對す、其の衝突や遂に免る可からざるものあり。而して羅馬と漢武と衝突の結果は、遂に如何の現象を呈すべき乎。勝敗は其の何れに歸するにもせよ、決して永く東西隔絶するを許さざりしなる可く、後年マルコポールをして、東方に關する奇聞を公けにして、歐人の好奇心を喜ばしむるが如きこと無かりしならん。吾人は、斯の如き史的想像を除外するとするも、三千年の昔に在つて、東西人種の接觸を見るのみならず、異人種相同盟して、他の異人種に當りしが如き、奇異なる現象を史上に認め、東方人種の爲めに氣を吐きたる、漢武の雄圖を思ひ、溯古顧今、轉た感慨に堪へざるものあり。



漢家天馬出蒲梢。首帶櫛華遍近郊。內苑只知御鳳  
鳴。屬車無復挿雞翹。玉桃偷得憐方朔。金屋粧成貯  
阿嬌。誰料蘇卿老歸國。茂陵松柏雨蕭蕭。

(李商隱)

### 讀孔子論

……………春秋時代の思想界……………

#### (一) 孔子に關する三著書

近來孔子に關する著書にして、世に公けにせられたるもの三、一に

曰く故文學博士蟹江義丸君の「孔子研究」、二に曰く文學士蜷川龍夫君の「孔夫子傳」、三に曰く山路愛山君の「孔子論」。孔子没してより二千五百年、文運の盛代なる明治の今日に至り、若かも孔子の故土ならざる日本に於て、相次いで此の如き著書の世に出でたるは、頗る奇觀とせざる可からず。然かも是れ學術の氣運が自ら此の如き方面に傾き來りしものにして、古人を傳し、古史を講じ、古學を究むるの風氣が、我が學術界に流行するの端緒なる可き乎。日露戰爭開始せられてより、武士道を研究するもの、泰西に於て日に益々多きを加ふ、此の時に當りて武士道の骨子とも言ふ可き孔學の研究せられ、孔子の論せらるるもの、亦た何等かの因縁なくんばあらず。余は此の如き著書の多く公けにせらるゝは、學界の益大なるべきを思ふが故に、國民を教育せんとするの士、即ち經世濟民の志を懷抱する學



者論客は、快を一時に取るの舉に出でずして、心を此の種の問題に留め、以て社會教育の資料に供せられんことを希望せざるを得ず。

### (二) 三書の價值

故盤江義九君の「孔子研究」は、兎も角も大著作也。最も苦心の作として世に傳へらるゝ書也。君が生前に於て文學博士の學位を授與せられたるも、此の書に在りと傳へらるる著作也。余は世に公けにせられたるの當時、一讀して君が心血を瀧ぎたるの著作なるを知れり。然れども惜い哉研究其の法を得ざるが爲めに、徒らに其の紙數を多くし、其の字數を多くし、尤然たる一部の書籍たるに止まり、孔子の孔子たる面目に至りては僅に其の十中の一を知り得たるに過ぎず。思ふに君の研究は徒らに參考書の多きを貪り、其の學殖の多きを恃

### 讀

み、其の資料の精確なるや否やを吟味せざりしが如し。故に其の作り上りたる孔子其の人ば、從來儒家の見たる孔子と、差異なき人物となれり。眞の孔子は果して君が研究したる如き人物なりしか、是れ余の疑ふ所也。

### 史

蜷川龍夫君の「孔夫子傳」は「孔子研究」を縮圖したるもの也。其の紙數を少うし、其の文を簡にしたるもの也。尋常一様の傳記にして苦心の作とは思はれず。從來傳記記者が取り來りし徑路を辿りたるものにして、余は之れによりて新しき智識を授けらるゝの機を得ざりしと雖も、初學者に取りては參考書位には適するならん。有體に白狀すれば孔子傳としては、兩書とも余の感服する所にあらず。

### 感

山路愛山君の「孔子論」は、世の最も進歩したる史的研究法(君が言によれば)によりて、孔子を論じたるものにして、所謂高等批評也。先づ其



の材料を精選し、支那に於ける古文書にして、孔子に關係ありと稱せらるゝ書籍若くは記載事項を否認し抹殺し、時勢を論じ、時人を論じ、以て孔子の孔子たりしを論議せり。論義と言はんよりも寧ろ考證せりと謂ふ可し。余は此書に於て稍々孔子の孔子たる面目を認め得たり。君は此の著を以つて十年讀書の結果なりと言ふ。然り苦心の痕は歴々として紙上に現はる。余は之れを讀んで、其の精到なるに驚き。其の孔子に對して新しき智識を得たるを感謝す。而かも余の頑愚なる、未だ解せざる疑問あり、敢て披瀝して教を乞はんと欲す、豈に批判すと謂はんや。

### (三) 孔子は人也

孔子は人也、神にあらざる也。歴史上の人物にして、歴史以上の人

讀

史

感

物にあらざる也。假作の聖人にあらずして、實在の人物也。孔子の事蹟を研究し、孔子の道德思想を研究せんと欲するものは、先此の點に著目し、歴史によりて其の人を知り、其の人を知りて其の道德思想を知らざる可からず。秦火ありて群籍失はれ、堆硯山の如く、儒者を坑にしてより、先秦の文物散佚して、世に傳はるもの太だ稀に、聊か研究の材料を失ひたりと雖も、猶髣髴として當時の事蹟を探討せられざるにあらず。然るに後の腐儒此の理を知らず、珠玉を鏤め、金粉を塗し、圓滿無瑕の偶像を畫き、胥率ゐて歴史以上の人物とし、學術思想界の神仙とし、果ては大學者、大政治家、大經世家と成し終んぬ。是れ豈活きたる人物を以て遇する道ならんや。實に自家の利益を網せんが爲に、骨董物視したるもの也。孔子の孔子として貴きは別に存す、大學者、大政治家を以て彼に擬するが如きは、史に



旨なるものと謂はざる可からず。漢代より下現代に至るまで、苟も儒教を以て標榜する學者の、孔子を説くもの皆然らざるはなし。是れ孔子の如何なる人なるかを傳ふるにあらずして、孔子の一身と一代とを粉飾するもの也。日本に於ける儒學者も亦た此の弊を受くるや大に、遂に一人の以て裸身の孔子を説きたるものを見ず。夫れ人を教ゆるには、人を以つて教ゆるより適切なるはなし。若し從來儒學者の説きたる孔子を以て、眞の孔子なりとせば、是れ人にあらずして神なり、歴史上の人物を以て、神として之を教ゆ、余は其の可なるを見ざる也。然るに愛山君が研究に成れる孔子論は、眞の人間にして、而して稍々裸身に近き孔子也。余の感謝を表するは之が爲也。

#### (四) 材料論

曾て重野博士、研究の結果なりとして、兒島高德を抹殺し、武藏坊辨慶を抹殺し、史界爲めに騒然、世之を稱して抹殺博士と云ひにき。愛山君は所謂最近の史的研究法を以て、古書を抹殺し、中庸信す可からず、禮記、大學信す可からず、左傳信すべからず、孟子信す可からず、易信すべからず、尙書信す可からずと喝し、一々其の例證を擧げて抹殺し終んぬ。世人は之を見て其の廣辭に驚き、其の大膽に驚きたるもの、如し。然れども余は之を當然なりと信じ、寧ろ平凡なるに驚かんと欲す。君が如き史眼と史筆とを有しながら、此の如き平凡なる抹殺は、余の却て奇とする處也。其の抹殺の方法に於てこそ異りはすれ、古人は既に業に此等の各書を抹殺し去りたる也。易の「十翼」の孔子と關係あるや否やに就ては先儒已に之を疑ひ、彼の宋儒歐陽修の如きは、其の童子問に於て偽作なるを言ひたりき。尙



書の信す可からざるは、閻若璩其の著尙書古文疏證に於て博辨宏辭、以て後世の僞作なるを論破したり。獨り毛西河は之に反對して、僞作ならざるを主張したりと雖も、到底確論たるを得る能はざりき。左傳の材料として薄弱なるは君の已に言ひたる如く、韓昌黎の一語及び左繡の評言によるも明にして、中庸、大學の確證としがたきも亦先儒之を看取したりき。孟子に至りては孔子を戴だき來たりて、自家の意見を皇張せんとしたるもの、固より證と爲すべきにあらず、孔子を知るに於て、論語の最も確實に近きは何人も疑はざる處、而も故岡松斐谷氏は、之を以て孟子、荀子の後に編成したるものなりとせり。其説に曰く「論語の書新注には有子、曾子の門人に成るとあり、然れども、全書に據て考ふるに、夫子の言を七十子の徒が、直に記せしものもあるべく、有子、曾子の門人が、其の師の言を記せしもあるべく、又は夫子の言にもあらず、有子、曾子の言にもあらずして、其人の已が隨意に心覺之の爲め記せしもあるべし、此の如きもの零々細々と世に遺りてありしを、輯して書を爲せしは遙に後なるべし。(中略)孟、荀二子も論語の全書を見たりし趣にはあらず、是れ論語の選二子の後に在るを知るべきの明證なり」と。夫れ或は然らん。

余は曾て論語、左氏、孟子、荀子、韓非子を合せ讀みて、其中に存する哲學的傾向に注意したり、而して下の事實を發見せり。余は論語の要部に於て、作者の時代に哲學的爭論ありし兆候を見ず。(中略)全體に於てかゝる論争に無頓著なるは論語一篇の傾向なり。此の傾向は文籍批評に従事するもの特に注意すべき所なり。何となれば孔子の時代に、若し老子の如き哲學ありて存せんには、一部の論語は必ず哲學的爭論の空氣に充つべければなり



こは、是君が所謂最近史的研究法の奥秘也。此の法によりて従來の學者が孔子に關係ありと爲したる書籍を抹殺し、延いて老莊哲學の存在をも否認したるものにして、洵に道理ある論法なれども、是とて新しき論法にあらず、岡松夔谷氏は論語成本の時代を論じ次で老莊哲學に及び、

楊墨の言は初て孟子に見えたり、蓋し夫子没し玉ひしより孟子の時に至るまで百三十四十年を経たり。楊墨は此間に興りしものなるべし。然れども其教は亡ひて傳はらず、莊子は夫れ孟子と時を同ふす、老子は後人の僞撰にして莊子の後に在るべし。

君が説は已に夔谷氏の道破したる處、且つ其の研究法も同一に出でたり。故に余は君が古書を抹殺したるを以つて、敢えて驚かざるのみならず、尋常一様奇とするに足らずと謂ふ所以也。

## 説

## 史

## 感

但此の論法によりて果して正鵠を得べきや否は、余の淺學未だ知る能はざる處、若し世の批評家にして此書に對するものは、必ずや議論を構ふるは、此の材料論にあるべし。

余曾て郷學先生に聞く、孔子の言行思想は論語一部に悉くす、他は多く信するに足らずと。余は是に於て孔子は宇宙天道に對する哲理を有したるや否に就き頗る惑ひぬ。何となれば一部の論語また一の哲理なく、古を説き、今を規し、日用普通の常識教を説示するに過ぎず、彼の季路が生死の問題を提起したるに、

未知生、焉知死(先進)

と一言の下に刎付け、遂に子貢をして

夫子之文章可<sub>レ</sub>得而聞<sub>二</sub>也。夫子之言性與<sub>二</sub>天道不可<sub>レ</sub>得而聞<sub>二</sub>也夫(公冶長)と嘆せしめたり。只



逝者如斯夫、不舍晝夜(子罕)

の一句あり、朱子は此の語中に天理の流行陰陽の消長を説き、宇宙の眞理を道破したるが如く解すれども、余は單に之を日月の過ぎ易きを嘆じたりと解し、朱子の解を以て僻説となす。此の如くにして孔子の言行の最も正確なりとして傳へらるゝ論語中に於て、余は遂に一語の宇宙天理に關する哲理を發見せずして止にき。已に哲理なし、争でか論争あらん。孔子及び其の門人は、全く哲理に於ては盲目漢たりしと斷じ。此の斷案を基礎として、余は孔子の語なりども、哲理を語りしものは皆之を否定したりき。左れど斯の如き斷定は、甚だ大膽なるを知るが故に、先儒の説きし如く、孔子は宇宙の哲理に關しては、一切緘黙したるものと解するは穩當なる可し。而も緘點も亦無と同じ、孔子の語として哲理を存するものを否定するに妨

説

史

感

たげ無し。

然れども當時老莊の如き、或ひは之れに似寄りたる思想、尙ほ細かに言へば、孔子の思想と反對せる思想、若くは學派が存在せしや否やは別問題也。

### (五) 孔子と老莊哲學

易は儒家の尊奉する一種の經籍にして、儒教の哲理は總て其の根原を此の書籍に存するものとし、漢以後の學者は争ふて之れを研究し、之れを解釋し、只及ばざらんを恐るゝものゝ如し。成る程易は後世の儒家が解釋するが如き、哲理を有するものとせば、所謂一元論にして兼ねて進化説を主張するに似たり。然れども余の疑ふ所は易の文と、彼の老子道德經中の文と相似たるものあるのみならず、全體

説

史

感



の傾向が酷似するの感なき能はず。是れを以て、余は易の哲理が孔子の學説と全然無關係なるを信するもの也。論語には「加<sub>三</sub>我數年、五十以學<sub>レ</sub>易、可<sub>三</sub>以無<sub>二</sub>大過<sub>一</sub>矣(述而)」とあり、史記には「晚年而喜<sub>レ</sub>易」とあるを見れば、或は讀みたることあらんも知る可からざるも、讀みたりとて學説と關係ありとは言ひ難し、況んや孔子の學は全然常識教にして斯る神秘的學説の入るを許さざるをや。只當時老莊の如き、或は孔子の學派と異なる學派、即ち堯舜の道にあらざる學派の存在したるや否やは、吾人の知らんと欲する處也。此の點に關して、岡松氏及び君の所論によれば、孟子の時代に揚墨ありて老莊なし、荀子に至つて初めて老莊なるもの出てたりとし、岡松氏は此の理由を以て老子道德經は莊子の後に於ける僞作と斷じ、君は南方の學派なれば北方に波及せざりしものと論じ、君の論稍穩當なるに似たり。余は老子

其の人が孔子時代にありしや否やを知らず。然れども孔子の學に異りたる、稍々老莊若くは之れに似たる學派の存在し、思想の流行したるを信せんと欲す。何となれば、論語に「攻<sub>二</sub>異端<sub>一</sub>者、斯害也而學而<sub>二</sub>とあり、且つ孔子が天下を周游して自家の主義を擴充せんとするに當り、到る處其の道行はれざるのみならず、迫害を受くるに至りしは、政治上の關係もあるべけれども、此の所謂異端者流との衝突が、其の一原因なるを信せんと欲す。如何なる學問にても突如として完全なる體を以て現はるゝものにあらず、恰も小支流の合して大川を爲すが如く、必ず完全なる體を組織する迄には、之れを成す分子若くは基礎なかる可からず。君の所謂歴史は鎖の連續なり、史學は孤立の現象あるを許さず。余は荀子時代に於て、老莊の名を以て彼れが如き哲理の、突然として支那思想



界に現出したるを怪しむと同時に、此の如き哲理の現出するまでには、必ず之れに似たる先驅者あるを思はずんばあらず。或は其の學理の印度哲學に酷似したるを以て、印度の影響を受けたるにあらずやと疑ふものあれども、其の證迹は考古學者の未だ發見せざる處、且つ夫れ哲理思想は水の如く、普遍的のものにして、何れの土を掘るも盆出する如く、其の地に於て發達し、東西其の處を異にするも同一の結果を示すこと敢へて珍しからず。故に老莊哲學が印度の哲學に酷似したるの理由を以て、其の影響を受けたりとは斷する能はず。此の理由によりて余は老莊哲學なるものは、支那に於て起り、支那に於て發達したるものと爲し、且つ此の學派は南方に於て發達したるものなることは君と共に認むる處也。

余は老莊學派が南方に於て發達し、儒學が北方に於て發達したるを

知ると同時に、論語一部は好し哲學論争の色彩を以て染點せられずと雖も、孔子の時代に在りて、早く已に老莊哲學の基礎と爲るべき學派の存在して、孔子一流の學說に反對したるを信せんと欲す。已に孔子は異端を攻むるは害のみと云ひたるによりて察するも、之れを知り得べし。夫れ陳蔡は南に隣す、孔子は弟子と共に茲に厄に逢へり。楚に至りては接輿之れを歌ひ、丈人、長沮、傑溺皆之れに反對し、冷笑を以て孔子を迎へぬ。彼等は民族の異性たるのみならず、早く已に荆楚の思想を以て北方學派に反對したるものにして、孔子の南方に志を得ざりしは、種々なる原因あるべしと雖も、學派の相容れざるも亦た其の一因たるを推論し得ざるにあらざる也。

(六) 孔子の政治論



君は孔子の政治論を論ずるに當り、蟹江君の所説を駁し、

近時孔子を論ずるものが、此の如く教化に重きを置きたるを非難するものあり、曰く禮樂の政治上、多大なる効力ありしは二帝三王時代、殊に周の盛時なり、戰國に至つて、支那の社會組織一大變更を経て、道德と法律とは分化して二途となれり。是に於て政治上効力を有せし禮樂も亦た昔日の勢力を維持すること能はず。孔子が時勢の大勢に反抗して、飽くまでも禮樂全能説を主張するは孔子の爲めに惜まざるを得ずと。惡是れ何の言ぞや。孔子の禮樂を唱へたるは必竟教化を以て政治を助けんとするに在しのみ(中略)孔子の教化を以て政治を助けんとしたるは今日と雖も猶ほ傾聽を價すべき教理に非ずや

と。思ひきや君が奇峭の史筆より、此の如き平凡論の點出し來らん

讀 史 感

とは。孔子が教化を以て政治を助けんとしたるは、余己に之れを先儒に聞けり、余は此の如き平凡なる解釋を君に要求せざる也。余の君に要求する處のものは、孔子の徳政論は何故に當時の諸侯に聞かれざりしやに在り、聞かるゝも實行されざりしやに在り、君は己に旅行者となりて、時勢の好材料を余に通信せり。過渡の時代を觀察して諸夏の形勢を談じたり。然るに之れと密接なる關係を有する孔子の徳政論が、當時に不遇なりしに關しては、余は何等會意の談を聞くを得ざりし、是れ實に余の遺憾とする處也。君は之れを判斷するを以て史的研究の藩籬を超越せりと思へる乎、史の徵すべきなきが爲めに其の推論を停めたる乎、已に時勢を觀察したる以上は、之が斷案を下すも、強ち史的研究の藩籬を超越したりとは言ひ難からん。余は畫龍睛を點せざるの感なき能はず。



史を讀むもの孔子の時代に及び、彼れが席煖かなる能はざるまでに、自己が經綸を實行せんとして違々たりしを見るものは、何人も何故に時勢が斯くまでに彼れに對して苛酷なりしかに思ひ及ぶ可し。彼れの根據としたるは魯衛の二國なりしも、晩年に至りては此の二國さへも、彼れが熱誠の言に傾聽せざるに至りしは、之れ豈に大なる因なしとせんや。孔子を論する者は最も見逃す可からざる重要な事實なるべし。

禮樂を以て教化の具となし、之れを以て單に政治を助くる方便とするは、或は可ならん。而かも孔子は「道之以德、齊之以禮」爲政「能以禮讓爲國乎、何有、不能以禮讓爲國、如禮何里仁」と説き、禮を以て殆んど爲政の全部と爲し、此の政治論を提げて諸侯に説けり。獨り之れを説きたるのみならず。之れを實行せしめんとせり。要するに

## 讀

## 史

## 感

孔子の不遇なりしは、此の凡の凡なる徳政論を以て、天下經綸の具に資せんとしたるが爲めにして、時勢は孔子を冷遇したるにあらずして、孔子の時勢を知るに盲目なりしが故也。

周室式微にして乾綱紐を解き、犬戎蕭牆に迫りて九鼎東に遷り、二代に監みて郁々乎たりし文明國も、一旦威を失しては統一の力なくして五霸互に強を競ふ。此の時に當りて最早禮樂の力は人心を繋ぐに由なく所謂人心惟危、道心惟微なり。是に於て乎周公の法は、大に變せざる可からざるの時勢とはなれる也。流石に管仲は支那に於ける大政治家也。時勢の此の如きを見るや、桓公を輔けて覇者政治を行はしめ倉廩實知禮節、衣食足知榮辱と絶叫し、道德の根柢を經濟に置き、遂に桓公をして諸侯に覇たらしめたり。是れ即ち富國強兵の術にして、能く周公の法を變じたるものと謂ふ可し。此の如き



は當時に在つて最も要領を得たる政治にして、諸侯割據互に雄を競ふの舞臺に立ちては、富國強兵の策また已むを得ざる也。孔子の生れざる以前の形勢此の如し、生たる後の形勢知るべき也。此の時勢に在つて徳政論を以て天下を率ゐんと欲す、是れ恰も現代に於て列國帝國主義を行ひ、富國強兵を策するの時に當り、非侵略主義、軍備縮少主義を以て政治の主義とし、之れをして一國に行はしめんと欲するものに異ならず。

且つ夫れ當時に於ける國民は、已に周の繁文褥禮に困して事の簡ならんを望み、無爲恬淡の道教思想が浸潤し來るを知らず、何處までも周の政道を標準として禮樂を以て國を爲めんす、是れ余の時勢に盲目なりと謂ふ所以也。六十年來東奔西走し、其の志を達する能はずして「鳳鳥不至、河不出圖、吾已矣夫」(子罕)と嘆し、遂に曾點の言に感

して、世外の人たらんとす、其の志や憐むに堪へたり。孔子の徳政論は、當年に處しては理想に過ぎず、後代の政治家に對しては参考に過ぎず、孔子は到底爲政の人にあらず。

### (七) 學者としての孔子

古より孔子を論ずる者、孔子を以て當時に於ける大學者なりとし、「易」の繫辭傳、「詩經」の刪定、「春秋」の著述等を以て其の證とす。然るに其の本人たる孔子は述而不作。信而好古と言ひ、敢へて大學者を以て居らざるのみか、謙遜自ら處し、假にも學者めきたる風なきは、論語一篇を熟讀するもの、直に悟了する處ならん。余は孔子を以て大學者とする後儒の僻説を排す。何となれば其の證となるべき易の「子翼」は、果して孔子の文章なるべきや否やは疑問に屬するものにして、



此の疑問を採つて證左となすことは、甚だ薄弱なる論據也。「詩經」の三千篇を刪して三百五篇となし、以て絃歌諷詠に供したるを以て大學者と爲すは、余の感服する能はざる處、當時存在したるものを採録するが如きは、大學者ならざるも決して難事とせざる處ならん。余は思ふ、孔子が若し此の如き刪定の事微りせば、二千餘篇の内、或は當時の史を説明し、後代よりして周代及び其れ以上の情形を知るの資料たるものありしならん。所謂逸詩として諸子雜書に散見するものを見るも、参考となるもの少からず、此の逸詩は即ち孔子の選中より落第したる文字也。「春秋」は後の史家が寶典とし、其の文字を論じては「謹嚴」と評し、其の意を論じては「亂臣賊子懼」と説き、之れを以て歴史の典型とし、敢へて一語を加へざるのみならず、争ふて之れが註釋を試むる千百重ならず。然れども孔子が「春秋」を著はしたるの意

は、果して後儒の説くが如き深意ありしや否やは余の俄に信ずる能はざる處也。何となれば「春秋」の文は餘りに簡にして、殆んど日記文の如き感あり、孔子が史の本體たらしめんが爲めに、若くは亂臣賊子をして懼れしめんが爲めに作りたるものとは推定する能はざる也。此の著作を以て孔子を大學者なりと斷するが如きは、未だ以て孔子の面目を知りたりと謂ふ可らず。以上の理由を以て、余は後儒の孔子を以て大學者なりと爲すの點には左祖する能はず。

### (八) 孔子の本領

孔子は決して大政治家にあらず、大學者にあらず。若し孔子に許すに大なるものを以てせば、夫れ只大常識家乎。



常識を以て人を教へ、常識を養はしめんが爲めに人を教へ、怪力を語らず、亂神を語らず、深邃なる哲理を説かず、日常平生に處し、何人も行ふべく、行ふて適せざる處なく、人の人たる本分を自覺し、何れの日何れの世にも人ど人との間に行ふて可ならざるなきは、孔子が教義の本領也。而して世に處するには、實踐躬行に在り、自ら驅めて息まざるに在り、人事を盡すに在り。其教義の萬古に傳へて易はらざる所以のもの實に此に存す。孔子の孔子として偉大なる人格も亦た此に存す、然るに後の學者之れを知らず、孔子の言行を解するに深邃なる哲理を以てし、牽強附會の説を以てし、或は大政治家の如く説き、或は大學者の如く論じ、此の貴むべき常識教の祖を以て人間以上の人物たらしめんとす、誤るも亦甚だしと謂ふ可し。

(九) 孔子論の特色

此の紛々たる俗儒の説を排して、君が此點に注目し、孔子の孔子たる面目を發顯し、常識の教祖たるを知らしめたるは、余の感謝に堪へざる處、此の書一たび出て、世の盲古者流を警醒すべきは余の信じて疑はざる處也、其の疑問を提出して妄言したるが如きは、是れ余の不明なるに坐するのみ。多罪々々。

贈君一法決狐疑。不用鐵龜與祝龜。試玉要燒三日滿。辨材須待七年期。周公恐懼流言日。王莽恭謙未篡時。向使當初身便死。一生真偽復誰知。

(白樂天)



### 清朝匪亂の片影

……洪秀全の謀反……

清國の老雄李鴻章の死を聞き、彼れが功名の行程を考へ、吾人は端なくも長髮賊の亂に想到す、長髮賊は即ち粵匪にして、清の道光三十年に起り、同治三年に至るまで、清國中部を擾亂したる匪徒也。洪秀全は實に之れが首魁たり。

前後十五年の間、清廷は全力を擧げ、朝野の名將勇卒を驅つて、漸く削平の功を奏したるものは、抑々征討軍の智畧匪徒に及ばざりしか、將た將卒は匪徒の驍勇に如かざりし乎、征討軍の總節制は智畧一世を蓋ひ、能く將卒の心を得たる曾國藩にして、彼れが幕下には弟の國筌あり、李鴻章あり、左宗棠あり、劉銘傳あり、江忠源あり、

感 史 讀

而して其の率ゆるものは、驍名北方に振ひたる楚軍なり、精銳中清の鎮たる湘軍なり、加ふるに淮軍の勇武、常勝軍の輕捷を以てし、雄將健卒雲の如く、而かも十四年の間、苦戰困闘漸くにして削平の功を奏するに至りし所以のものは、實に匪魁たる洪秀全の能く戦ひ、能く拒ぎたるによる。徒手亂を唯へ四百餘州を震蕩し、北京朝廷をして奔命に倒れしめんとするに至りし彼も亦た、稀世の怪雄と云ふべきかな。

感 史 讀

史家彼れの容貌を記して曰く『軀幹長大、鳳眼長髯、性豪宕にして能く人に交り、畧々文字に通じ英語を解せり』と。彼れの容貌は已に凡人にあらざるを示し、其の英語を解するに至りては、當時支那に於ける人物としては珍とすべきものならずや。思ふに彼れの廣西省潯州府桂平縣に天主教徒となり、萬民平等、四海兄弟の教義を絶



叫したる、恰かも彼のマホメットが亞刺比亞の砂漠中より回教を唱へ出でたるが如し、彼れは實に支那に於けるマホメット也。マホメットは右手に劍を提げ左手に聖經を捧げて、中央亞細亞の人民を其の足下に跪拜せしめたる如く、彼も亦た、劍を閃かし、教義を叫びて、南清の人民を足下に跪拜せしめたり。只、一は宗教宣布を以て終局の目的とし、一は宗教を利用して清廷を顛覆し、以て野心を遂げんとしたるの差のみ。而かも此の差は終局の目的に於て、成不成の大なる差を生せしめたり。然れども彼れの起るや、宛然火山の噴出したる如く、實に目覺ましき光景なりき。道光三十年、彼が廣西省桂平縣金田村によりて、叛旗を擧げてより、其の翌年咸豐元年八月には、大に官軍を破りて廣西省に出で永安州を陥れ、大平天國なる偽國を僭立し、自ら天國王

説 史 概

と號し、部下の將士を王族としたるは、平將門が下總の猿島に偽都を建て、平親王と稱したるの比にあらず。三月には湘江を溯りて全州を陥れ、直ちに湖南に入り、長沙府を圍み、一方には河船によりて、岳州を襲ひて之を陥れ、長江の流れを下りて漢陽府を攻め、武昌を占領し、五省樞輻の要地に據り、咸豐三年には九江を襲ひ、安慶府を陥れ、遂に金陵に逼り、之を略取して首都とし、官制を設けて茲に全く南清の一王となれり。其の事を爲すや、電轟雷擊殆んど鬼神の如きものあり、若し此の勢にして直ちに安徽より直隸に入りしならば、燕京の存亡未だ必ず可からざるものありし也。否、確かに清廷を顛覆すると難からざりし也。

彼れの金陵に據るや、直ちに長江の南北を攻略して、官軍の聯絡交通を遮斷せんと試みたるは可也。而かも何故に彼れは金陵を以て根

説 史 概



據地となし、全軍の主力を三部に分ちたるか、思ふに彼れの志を得る能はざりしは、此の一策の誤りに基因したるものならん。

蓋し金陵は、長江の天險に據り、地勢百餘里に亘り、南清中央の金城也。其の之に據る、長江の南北を控制し、以て支那中部の運命を制することを得ん、而かも北の方、燕京の死命を制すること殆んど難し、是れ實に支那歷代の國朝存亡の跡に徴して歷々たる處。曩に康熙年間に於て、吳三桂なる者あり、清朝に反して中清を領略し。明の末裔、鄭經なるもの臺灣より出で、南清地方を略す、皆志を得る能はずして倒る、是れ其の占據する處の地勢宜しきを得ざるのみ。故に力、燕京を制するあらば、直ちに全力を擧げて北に向ふべきのみ。洪秀全は謀茲に及ばず、専ら長江の南北を領略し、其の首腦たる北京を顧みざりしは、彼れの志を成す能はざる所以也。

威 史 識

さはれ、彼れが金陵に據りてより、全軍の向ふ處を指示したるは、其の方略頗る見る可きものあり。

彼れは先づ全軍を三部に分ち、一は金陵より北東に向つて河南省に進入し、河北を窺はしめ、二は江南江西に進入し、江西省南昌府を畧して、浙江を控制せしめんとし、三は安徽及湖北の要地を占領し、以て支那中原を控制せしむ。此の一般方略にして、各方面共に成功したるならんには、或は北京清廷の死命を制したらんも知る可からず。雖も、此の主力を三部に別ちたるは、却つて全軍の運動に大なる影響を興へ、進取の形勢變じて拒守の態度となるの原因を誘致したり。一部の不利は他部に於て之を補はざる可からず、一方の弱は他方の強を以て援はざる可からず、斯くして全軍の主力を殺ぎ、遂に金陵に盛るに至れり。金陵陥落して彼れは逃るゝに路なく、十五

威 史 識



年榮華の夢一朝にして果てぬ。彼れは確かに支那に於ける革命軍也。彼れは宗教を利用して、野心を遂げんとしたるに相違なしと雖も、其の野心たる尋常一様、支那一流の流賊たるものと、自から其の性質を異にせり。當時支那に在留する泰西人も、亦た革命軍として之を見、軍需兵器を送りて之を助くるものありき。若し彼れにして目的を茲に立て、北京清廷を顛覆するあらば、彼れ遂に四百餘州に君臨すべかりし也。然るに彼れは策筈に出でず、其の本を倒すを知らずして、徒らに枝葉を殘刈せんとしたる結果は、却つて敗亡を招致するに至れり。是れ抑々愛親覺羅氏の運命未だ盡きざる處乎。

蓋し洪秀全の金陵に占據したるは、支那天府の寶庫たる、長江沿岸の各地を領畧し、天下を二分して清廷と並び立たんとしたる也。然れ

感 史 識

ども是れ大局を見るの明ある策略にあらず。康熙雍正の治平、已に去り、天下無事に狂れ、清廷また治に居て亂を忘れざる底の用意なしと雖、其の根幹は猶ほ牢として抜く可からざるものあり。若し之れと天下を争はんと思せば、急遽其の根幹を絶たざる可からず、南部によりて天下二分の策を劃する、是れ其の誤り也。支那の鼎鼐は常に北方強の爲めに異動し、明の滅亡したる殷鑑の遠からざるを知らば、洪秀全の此策、成功し得ざりしは固より其の處なりと謂ふ可し。彼れは其の志を遂げずして倒れぬ。而かも徒手、清廷と天下を争はんとしたる意氣と、數十萬の兵を擁して、十五年の間四百餘州を震駭せしめたるに至りては、彼れ豈に尋常の匪兒ならんや。彼れの部下には智謀傑出の李秀成あり、勇武絶倫の馮云山あり、其他石達開、韋輝、洪大全等、皆是れ才略膽力併せ有するもの、彼れは此等

感 史 識



六十  
 の部下の將とし、能く將卒を統一して、清廷を困扼の境に立たしめたる、また一世の雄と稱すべき也。而して世の史家たるもの、彼れに就いて多く研究する處なく、支那固有の流賊視するに過ぎず。若し夫れ支那の匪類を研究し、斯くの如き人物を研究するならば、其の興味や、決して梁山泊を主題としたる水滸傳の比にあらざるべし。

連城閉後萬山荒。忍棄郊原作戰場。賊有先聲如唳

鶴。官無奇策任亡羊。飄搖鴻雁飛難緩。潦草弓旌氣

不揚。猶勝驕淫諸將吏。移營終歲避鋒鏑。

(張船山)

### 明末亂離の史片

……積善錄序を讀む……

梅雨溟濛神氣鬱陶、門を出づるに懶し。乃ち亂堆の書架より、清の諸家文鈔を抽いて讀過す。中に邵青門が積善錄に序したる一文あり、一讀余をして無限の感想を惹起せしむ。蓋し青門は清の諸家中に在つて叙事に巧みなるもの、而して此の序の深く人心を感愴せしむるも其の叙事に巧みなるの致す處歟。

積善錄とは如何なる書ぞ。彼れの説く所によれば、平江の老儒朱翁が、吳舍人孟舉の所爲にして、饑を賑し、災を救ひ、責を已にし、喪を助くる等の諸善事を排續して、之に名づけたるもの也。彼れは孟舉が如何なる人物なるかを説明して曰く、



孟舉博雅。以詩文名。又精書畫賞鑒。雅不樂仕官。予擬其品。當在揚鐵崖倪雲林間。詎以是編重。朱翁之意。亦以風乎世之擁貲自封。財生而心死者耳。

知るべし、其孟舉なるものは尋常神佛に歸依し、妄りに未來を祈るが爲めに、喜捨施行するの徒にあらざるを。而して又朱翁が此善行を世に表彰せんとするの意をも知るべし。貲を擁して自から封じ。財生て心死する者、豈に特に明代に限らん、吾人は屢々現下目前に於て、此種の人物に遭遇しつゝある也。

彼れは積善録の中に、史傳の闕を補ふべく、世を論ずるの士、亦た或は斯に取るあるの事實ありとして之を點出せり。

孟舉に疎戚あり、費君名は彦芳と曰ふ。明の萬歷の間郷に擧られ崇禎五年、平涼隆徳の令に補せらる、未だ幾ならずして流寇城に

薄り、守辨某先づ遁る、君埠に登りて賊を扞き、流矢に中りて城陷る。賊君を執へ、署舎を掠む、蕭然として長物なし。詫つて曰く、窮是の如し、其れ好官ならんやと、縛して殺さず。是より先き君、丸書を以て援を固原道陸公夢龍に乞ふ。其返書に曰く、第堅守せよ、且日自から兵を提げて來らんと。而して書賊の爲めに得らる。

賊則ち覆を六盤山に設けて、以て夢龍の至るを待つ。陸至り、伏に陥りて力戦し、重創を被りて死し、全軍殲く。賊、君の援を乞ふを怒り、乃ち君を害す。君挺立して刀を受け、腰頸皆な穴を穿ち、以て死す。事聞す、當さに優卹せらるべし。然るに逃辨某、樞部に賄ふて罪を君に卸し、城守の謀疎なるを謂へり。故に僅かに奉直大夫靜寧州知州を贈らる。喪歸りて、貧にして葬むること



能はす、二子又た相繼て死す。孟舉慨然として爲めに三喪を擧げ且つ其幽に銘す。蓋し君の死を距ること四十九年矣。

國の爲めに官を守り、義の爲めに賊手に斃れ、而して朝廷厚く之を賞すべきに、却つて其の葬を營む能はざるが如きは、何ぞ其悲惨の極なる。青門は何故に費君が、斯く朝廷の薄遇を受けたるやに就き、孟舉が銘する所の碑文の大略を擧げたり。

明季の仕官は、獨り進士を尊び、而して其中又門戸の黨あり。出づる必ず進士に由り、仕ふる必ず門戸に入れば、進むこと捷くして、退くこと難く、聲譽起り易うして註誤復し易く、職を失し節を敗るも、罪を飾りて功となすべく、其の力一世の刑賞是非を顛倒して以て難しと爲さるに至る。公特に進士に由らず、門戸に入らず。迂拙を以て官を守り、封疆に死して而して聞ゆる無し。

賢者進みて愚者退ぞき、義臣賞を得て、奸臣罰せらるべきは、是れ普通の道理也。然るを其の黨に依り、其の人に依り、賞罰是非を顛倒するに至りては、是れ國家廢滅の時運に迫りたるものにして、四百餘州は已に朱氏の天下にあらず。長城以北に鐵蹄響きて、長白山頭朔雲の萃たるもの豈に宜ならずや。青門は更に明末朋黨の禍を痛論して曰く、

蓋明白三熹宗時。閹禍蔓延。正人刳屠略盡。思陵之世。僅存者一二。斬刈糜爛之餘也。而門戸愈堅。朋黨之禍愈熾。黨同伐異。賢者不免。卒之君子不勝小人勝。而明祚亦移矣。二百八十年無恙之金甌。破碎於千百庸進士之手。相傾相軋。馴至土崩瓦解。而原諸臣之心。則宗社可覆。君父可亡。而進士門戸之局。必不可破。百世而下。讀史者有餘痛一矣。

讀んで茲に至り、卷を掩ふて獻欵に禁へざるものあり。蓋し閹官の



禍、朋黨の弊は、支那歴代の鼎鼐を顛覆したる横杆にして、廢滅の跡を探索すれば、總て此力によらずんばあらず。閹官の國權を弄するに、朋黨の相軋りて政綱を弛廢するとは、國家の紛亂を招き、國勢を陵遲せしむる所以にして、之を古今の史に徴するも其跡炳焉たり。豈に特に明のみならんや。只明は其禍の大にして其弊の特に著しきものなる而已。

國の亡ぶや、其外より來るもの稀也。物先づ腐れて虫、之に生じ、豆熟して實、莢を脱す。國先づ廢亡の因を作りて、敵國外患之に乗ずるのみ。孟子曰く、敵國外患なきものは其國亡ぶと。蓋し敵國外患なるものは、國民を一致せしむるの誘因にして、之れ無くんば國民一致の精神を缺き、立國の基礎を動搖せしめ、其國として立つ所以を失ふ。然るに支那歴代の興亡を論ずる史家は、其亡滅を外夷に歸

感 史 概

して、宦官の禍、朋黨の弊に因するを言ふもの少也。是れ其の言ふを諱むか爲か、將た眼光の透徹せざるが爲め耶。

何れの時、何れの國に於ても、小人のあらざるなく、朋黨の存せざる無し。然れども其の禍を未然に防ぎ、其弊を未成に除くは、爲政者の意を致すべき最要の時務にして、其禍を蔓延せしめ、其の弊を助長せしめ、遂に防遏排除する能はざるに至て、國家の廢亡を嘆ずるも遂に及ばざるのみ。

蓋し朋黨は利に由て成る、權勢を利し、金錢を利し、自家に便ならざるものを去り、自家に利するものに與みす。己に自家に利あるを以て目的となす、眼中他愛なく、他利なく、又た何んぞ國家あらんや。若し自家に利ありとすれば、市井無頼の徒も吾が友たるべく、我黨たる可し。自家に利なしとすれば、國家を破壊するも敢へて意

感 史 概



を爲さず、綱紀斷すべく、倫常斁るべく、刑賞是非を顛倒するはた何ぞか怪しまん、斯くして國家を危局に陥るれ、亡滅の悲運を招く固より其處也。今の政黨なる者は朋黨にあらず、其の質に異なり、其の目的に異なり、比較權衡すべきにあらず。而かも雨、霰、雪や氷と變れども、落れば同じ谷川の水たるを知らば、其弊の極まる處、禍を國家に及ぼす、同一の果を示すなからんや。局に當る者は三省して可也。

明黨の禍國家を滅亡する固より悲しむ可し。世の國家に忠なる者、奉公の義に勇なる者、一死國に報い、名を百世に傳ふべきものが、却て他の爲めに毀傷せられて、悖逆の名を得るに至りては、更に悲しむ可からずや。青門は特に論じて曰く

嗚呼。費君<sub>以</sub>老孝廉<sub>身殉</sub>城社<sub>而</sub>事<sub>往</sub>世移。史書既未<sub>必</sub>錄<sub>而</sub>鄉里亦鮮<sub>下</sub>

有<sub>能</sub>記<sub>其</sub>事<sub>者</sub>。向<sub>微</sub>孟<sub>舉</sub>則<sub>忠</sub>臣<sub>姓名</sub>。幾<sub>何</sub>不<sub>爲</sub>猫<sub>貉</sub>噉<sub>盡</sub>。而<sub>羈</sub>魂<sub>之</sub>泣<sub>青</sub>燐。而<sub>號</sub>宵<sub>露</sub>者。且<sub>求</sub>一<sub>杯</sub>之<sub>安</sub>而<sub>不</sub>得<sub>也</sub>。

古來の史乘にして、忠臣姓名を録せざるのみならず、其の事蹟を轉倒し、其の功業を滅して、却て悖逆の名を後昆に傳へつゝ者あるは、屢々見聞する處也。是れ史家の公平を缺き、其の世運と時論とに誤解されたる結果に外ならずと雖ども、此誤解は朋黨比周の結果、忠を逆となし、義を奸となしたるによらずんば非ず。思ふて茲に至れば青門一篇の序文、是豈に警世の大文字に非ず耶。

百歲春光強過半。匡時力短媿鳴珂。詩書萬卷都無用。惟有先賢正氣歌。

(丘瑜)



## 蒙古來

……………國威宣揚史の第一頁……………

## (一) 大危難

吾人は我が國史を讀んで文永、弘安の時に至り、慄然として身に粟するを覺えずんばあらず。神武皇基を開いてより二千年、金甌無缺の國家が、東海波濤なる間に屹立し、未だ曾て他の駟聲を臥榻に容さず。芙蓉の玲瓏たる孱顔が、八朶其の美を世界に輝かすが如く、世界に超絶したる國體が、國民の齊しく萬邦に誇示する所なりしに、何者の暴漢ぞ、敢て虎狼の慾を逞うして呑噬を試みんとはしつる。神功皇后が曾て三韓を征伐して、國威を異邦に示してより、高麗、百濟との交通の道開け、彼我往來して隣交の輯睦は歳を追ふて親厚

讀 史 感

讀

史

感

を加へ、彼れは我が國體の美と民性の美なるに羨仰したりき。中古に至りては遠く隋と相交はり、音耗は「日出づる所の天子」より「日没する處の天子」に通せられ、次に唐代に及んでは、片帆滄溟を破りて往來比隣の如く、佛典を講究するの僧侶往き、儒學を研習する書生往き、彼我友邦を以て相待し相遇し、善隣の交誼愈々親を加へ、未だ曾て呑噬の狼心を狹むが如きことなかりき。唐の天命茲に終焉を告げ、寶鼎趙宋に移りてよりも、猶前代の修交を繼ぎ、敢て我に加ふるが如き無禮の事なかりき。我も亦隣交を重んじて、假し彼に兵革の不幸あるも、之に乗ずるが如き事なきのみならず、其の主を換へ其の代を異にするも、依然として善隣の修好は失はざりき。何ぞ圖らん。湖北大漠の地に颯起したる蒙古が、趙宋の寡婦を威嚇したる餘勢を以て、無禮を我に加ふるあらんとは。愚者は驚き、智者は愛へ、勇



者。は。奮。ひ。國。民。の。敵。愾。心。が。王。然。と。し。て。海。内。に。充。滿。す。る。に。至。り。し。は、  
固。よ。り。其。の。處。な。り。と。謂。は。さ。る。可。か。ら。ず。

然れども我は東海の一島國なり。國體の美と民性の美とは萬邦に超  
絶したりとは言へ、彼が歐亞の風雲を叱咤し、四百餘州を席卷せる  
餘勢を以て、來つて我に臨む、其の勢ひ正に磐石を以て累卵に加ふ  
るが如きのみ。我が日本が如何にして此の大禍を拂ひ得べき乎、如  
何にして此の危難より脱し得べき乎。文永より弘安に至るまでの我  
が日本は、殆んど狂瀾怒濤の間に漂蕩するに似たり。東海の天に柵引  
きたる黒雲は今しも大風雨を覆し來らんとし、其の斷處よりは、大  
魔王が目を瞋らし、燄を吐いて攫むべき機會を窺へり。實に我が日本  
が有史以來初めて遭遇したる一大危難なり。

個人にして自個を愛するの精神を發揮するあらば、他人は決して侮

辱を我に加へざる可し。之れと同一の理を以て國民が國家を愛する  
の精神を發揮するあらば、敵國如何に強なるも、争でか我に暴を加  
ふることを得ん。國の亡ぶるは精神を亡するが爲めなり。我が祖先  
が如何にして此の大禍を拂ひ得たる乎、如何にして此の大危難より  
脱し得たる乎、聽け、語らん、豈に軍國の教訓たらざらんや。

(二) 大帝國

頃は西曆一千百九十年代、蒙古の荒漠たる原野の一隅に、蓋世の奇  
男子は右手に凝血を握りて地に墮ちぬ。是ど即ち成吉思汗帖木真な  
り。長するに及んで神異、雄略人に絶し、兵を用ゆること鬼神の如  
く、西征東伐、群雄を征服して新帝國を建設し、馬を天山の頂に立  
て、世界征服の大志を懷きて、先づ中央亞細亞の野に突入し、鐵門關  
を破り、都を尋思干城に奠め、土耳其を破り、露西亞、匈牙利を攻



め、波斯を征し、歸りて萬里の長城を踏破し、以つて支那全土を鐵蹄の下に蹂躪し去らんと試みたり。然れども蓋世の英雄も天運自から免かる能はず、征途の半ばに於いて、大星は六盤山の朔雲深き處に落ちにき。

彼は四子を殘せり。長を朮赤と云ひ、次を察合台、三を窩濶台、四を拖雷と云ふ。成吉思汗の未だ死せざるの時に於て、彼が攻畧したる歐亞の版圖を擧げて、此の四子に分ち與へ、以て四王國を建設せしめたり。蒙古新帝國の領土其の龍大なる、殆んど北半球の十分の八を占め、四方萬邦盡く朝貢し、世界有史以來未だ曾つて見ざる所、盛なりと謂ふ可きなり。

忽必烈は拖雷の子にして、成吉思汗の孫たり。彼は世祖として王位を繼承するや、忽ち南下して漢族の中土に突入し、金を滅ぼし、趙

宋を撃ち、遂に四百餘州を平定して之に君臨し、其の餘威東海に屹然たる我が帝國に向つて、併呑の暴慾を試みんと擬するに至れり。彼の此の擧は世界混一の大目的を有したる爲め乎、將た我が帝國の美なる風土を羨望するの餘に出でたるもの乎、此の事に關しては、マルコボルなるもの吾人に語るに左の言を以てせり。

日本は東海の島國にして、中國を距ること三千裡、邦土甚だ大にして、國民は容顏清秀風采優美にして舉止閑雅なり。彼は偶像を拜す。曾つて外邦の羈絆を受けたることなく、彼等の國王によりて統治されたり。彼等は黄金を所有すること甚だ夥多しく、實に無盡藏なり。然れども國王が海外に輸出するを禁じあるが爲めに商賈の彼の土を過ぎるもの甚だ寡く、船舶の彼の土に航するもの殆んど稀なり。事情已に此の如きを以て、國王の宮殿の屋宇は、



七十六  
 我々の寺院が鉛を以て蔽はるゝ如く、黄金を以て蔽はれたり。各  
 室の床は著しき厚さの純金を以て作られたり。窓牖は黄金を以て  
 裝飾せられたり。此等の價值を算し來らば、宮殿に於ける富は、  
 聞くもの恐らく信を措く能はざる可し。國富は獨り黄金にのみに  
 限りたるものにあらず、價值貴き寶石は累々たり、殊に赤色の  
 眞珠は其の形大にして、産額も極めて多く、其の價は決して白色  
 のものと譲るなし。

島國に於ける此の如き富は、大汗忽必烈の胸臆を盪躍せしめ、彼  
 れをして此の島國を征服し、自己の版圖に歸せしめんと希望を  
 懐かしめたり。此の希望を達せんが爲めに、部下のアバカタン、ボ  
 ンサンシンの二將をして、無数の艦隊と數萬の軍隊を統督して、  
 外征の途に上らしめぬ (Marco Polo's Travels)

マルコポロは伊太利ヴェニスの産、西曆千二百六十四年に於て、波  
 斯の使節と共に元都開平府に至り、忽必烈に謁して彼れの信任を受  
 け、彼れの秘密顧問として世に知られたるものなり。彼れの語る處  
 にして信なりとせば、忽必烈の我が國を侵犯せんとしたるは、正に  
 世界統一の大望よりも寧ろ寶物を得んとしたるに在りしに似たり。  
 そは兎も角も彼れの日本を征せんとしたるは一朝一夕の故にあらず、  
 此の目的を達せんが爲めには高麗王に命ずるに兵艦糧食の準備を以  
 てし、或は使者を送り、或は國書を送り、濫言以て誘かんと計り、  
 威喝之れを服せしめんと擬しにき、彼れが送りし國書なるものを見  
 よ。

上天眷命、大蒙古國皇帝、書を日本國王に奉す、朕惟るに古より  
 小國の君境土相接し、尙ほ務めて講信修睦す、況んや我祖宗天の



明命を受け、區夏を奄有し遐方異域 威を畏れ徳に懐く者、悉く  
 數ふ可からず、朕即位の初、高麗無辜の民久しく鋒鏑に瘁ゆるを  
 以て、即ち兵を罷めしめ其の疆域を還し、其の旄倪を反す、高麗  
 の君臣感戴來朝し、義君臣と雖も而かも歡父子の若し、計るに王の  
 君臣も亦た已に之れを知らん、高麗は朕の東藩なり、日本高麗に  
 密邇し、開國以來亦た時に中國に通せり、朕が躬に至りて而かも  
 一乘の使の和好を通ずる無し、尙ほ恐らくは王國之を知る未だ審  
 ならざるを、故に特に使を遣はし書を持って朕が志を布告せしむ、  
 冀くは爾今以往通商问好を結び、以て相親好せん、且つ聖人は四  
 海を以て家と爲す、相通好せざる豈に一家の理ならんや、兵を用  
 ゆるに至ると、夫れ孰れか好む所、王其れ之れを圖れ、不宣  
 至元三年八月

威 史 讀

書意何ぞ無禮なる、居然聖人を以て自から居り、通好せずんば兵を  
 以て征すと云ふ、天下豈に此の如き亂暴なる聖人あらんや。彼れは  
 其の雄を恃み、威喝を以て我を屈せしめんと擬したるも、而かも彼  
 れが胸中には日本の征討は、果して他の小國を征服したるが如き結  
 果を得べきやに就ては疑惑なき能はず。彼れの臣にして其の必勝の  
 策なく徒らに國費を糜するに過ぎざるの理由を以て諫争したるもの  
 あり。之れが爲めには緇衣の徒をして我が國情を探らしめたり、之  
 れが爲めには國書捧呈の使者をして、西海の地理を踏檢せしめたり  
 斯くの如く彼は準備を盡し、偵察に偵察を重ねて、愈々征東の大軍  
 を起しぬ。我が日本に取りては由々しき大事なり、豈に露國が滿洲  
 を占領したるが如き今時の比ならんや、國家存亡の危機は目睫の間  
 に逼り來れり。

讀

史

威



(三) 大決心

當時日本は人皇九十年代龜山天皇の御宇にして、北條時宗は父時頼の後を繼ぎて鎌倉に執權たり。

夫れ山雨來らんと欲すれば風樓に滿つ、凡眼者は之れを悟る能はずと雖も有識者は既に此の事あらんを憂へ、不測の外患が國家に落ち來るべきを豫想したりき。彼の奇僧日蓮の如きは其の一人なり。彼れは立正安國論を著はし、人心の邪路に迷へるを悲しみ、極力他宗を攻撃し、大難の我が國家に落ち來らんことを豫言したりき。彼れが此の如き激越の文字を吐喝するに至りしは素と宗教上の異見に基くと雖も、其の國家の運命を斷じて、大膽にも國難の來るべきを豫言したるが如きは餘に一頭地を抽きたる活眼者と云ふ可く、此の時已

讀 史 感

に西山の彼方には遠雷般々として黒雲を呼びつゝありしなり。果せるかな忽必烈は高麗王に命じて國書を我が國に致さしめたり。而して其の國書は彼れが如く無禮を極めたり。乃ち無禮を極めたりと雖も、朝野愕然たり。如何にして此の國書に答ふべきや、寧ろ答へずして止むべき乎。朝議は一旦之れに答ふるの議に決し、案を草して之れを鎌倉に示したりと雖も、執權時宗、副署政村は其の書辭の無禮なるを見て曰く、是れ神州の威を損じ武を汚すものなりと、毅然として之れを却くべきを上奏せり。鎌倉幕府が此の果斷は實に我が尊とむべき歴史の汚點を免れたるのみならず、我が國威をして宇内に煥乎たらしめたるものにして、其の今日に至るまで東海の獨立國として四方の覬覦を斷ちたるもの、此の一時に存するを知らざる可からず。若し此の時に於て其の威に懼れ其の言に瞞せられ、答書を

讀 史 感



裁して彼れが意を満すが如きことあらんには、千歳の下に我が國史を繙くものをして、痛憤に堪へざらしむるのみならず、無缺の金甌が亂暴なる聖人の手に破碎されたるやも未だ知る可からず。

幕府が答書を與へずして元使を逐ひ返すや、國民は一齊に起ちて外難掃攘の大猛心を起し、敵愾心は日本國民の有ると有らゆる階級に於て醗酵せり。後嵯峨上皇は五秩の賀宴を停止し給ひ、二十二社に奉幣して蒙古難を告げ、幕府は關西沿岸の守護職に令して其の防備を嚴修せしめ、諸社諸寺をして厭攘法を行はしむ。此の如く天下の民心は總て外難掃攘に歸向しつる間に於て、元の使臣は先づ其の手を我が對馬に下し、島民を虜にして歸り、再び其の虜を好餌として我を誘はんと試むるに至れり。

斯くて筑紫の海は波立ち、邊警朝に來りて羽檄夕に飛び、天下騒然

たり。而かも幕府は泰然として山の如く、其の書を却ること二たび、遂に忽必烈をして兵力相争ふにあらずんば、其の目的を達する能はざるまでに餘義なくせしめたり。斯くして所謂文永の役なるものは其の發端を示せり。

(四) 大襲來

忽必烈の素志已に日本を征服せんとするに在り、使者遂に君命を全うする能はざるを見ては争でか其の儘に止まんや。彼れは其の暴を遂げんが爲めに、已に準備を命じたりし高麗に忽敦、洪茶丘の二將を遣はして出征の命を下し、一方には襄陽の生券軍に旨を降して死罪を免じ、日本征討の軍に従はしめぬ。

文永十一年、元及び高麗の諸將は全軍を督して昌原府の合浦を開帆して我が對馬に來寇せり。此の警報の守護代に達するや。宗の助國



八十餘騎を以て之を海濱に邀撃したるも、衆寡遂に敵する能はず、一族を擧げて陣歿せり。敵は全島を劫掠し、轉じて壹岐を侵す、守護代平景隆亦た助國と同一の運命を負ひぬ。

十月十四日申時に、壹岐島の西おもてに、蒙古の兵船つく、其中に二艘より四百人ばかりたりて赤旗をさして、東の方を三度、敵の方を三度拜す、其の時守護代平内左衛門景隆並に御家人、百餘騎庄の三郎が城の前にて矢合はず、蒙古か矢は二時ばかり射る間に守護代が方には二人手負其の敵は大勢なり、されども遂にかなふべくもあらざりければ、城の中に引退て合戦す、同十五日に攻め落されて城の内にて自害す、同十六日、十七日、平戸、能古、鷹島邊の男女多く捕らる、松浦黨敗北す(八幡愚童記)

彼等は對島、壹岐の二島を侵略して、更に筑前の今津に向ひ、水陸

並び進んで博多に逼迫し來れり。

十月二十日未明より、蒙古の一手陸より押し上り、馬に乗り旗をあげて攻めかゝる、茲に前少貳入蓮覺慧、孫わづかに十二三なるが、矢合の爲めとて小鎗を射出でたりしに、蒙古一度にどつと笑ひ、大鼓をたゝき銅羅を打て鬨をつくる事夥だし、日本の馬ども之に驚きおごりはねくるふ程に、馬をこそ刷ひしか、向はんとする時のおくれける中に射かけらる、蒙古が矢は短かしと雖ども、矢の根に毒をぬりたれば、ちどもあたる處毒氣に傷く、かくて敵より數百人矢さきそへて雨の如く射けるに、向ふべくもあらず、楯、鋒、長柄物の具のあき間をさして一面に立ち並らんで、もしよするものあれば、中に包んで引き退き左右より端をまはし合はせて、とりこめて皆な殺しける、其の中によくふるまひ死したる



をば、腹を裂き肝を取りて飲みける、もよより牛馬の肉をうまきものとする國なりければ人のみならず射ころさるゝ馬をもとりて食とせり、鎧輕く馬に能く乗り、力つよく命をします、豪勢勇猛自在きはまりなく、よくかけ引きせり、大將は高き處にあがり居て、引べき處を逃鼓を打ち、駈べき時には攻鼓をならし、それに從へてふるまへり、其の引く時に鐵砲とて、鐵丸に火を包で烈しくとばす、あたりてわるゝ時、四方に火炎ほとばりて、烟を立てくらます、又た其の音甚だ高ければ心を迷はし肝を消し、目くらみ耳ふさがりて、東西を知らずなる、之れが爲め打たるゝもの多かり。

當年苦戰の狀目睹するが如く、元軍猖獗の勢讀む者をして悚然たらしむ。

蓋し我が軍勢の此の如き苦戰を爲し、元軍をして筑紫の一角を蹂躪するを得せしめたるは、火器の利我にあらずして彼れに在りしが爲めのみ。所謂「鐵丸に火を包みたるもの」は彼れの最も精銳なる兵器として利用したるものなるに、我は之れを見るさへ初にして、殆んど天魔の如き感を懷きしなり。若し之れなくば、假令百萬の元軍稻麻の如く、竹葦の如く押し寄せ來ることも、賴血を日本刀に劔らして、寸歩だも我が神州の土を汚さしむることを爲さざりしなり。我が護國の精神の旺盛なる、斯る天魔の業をも物ともせず、奮進拒戰して彼れが驕志を挫きぬ。

一夜風雨ありて筑海怒號、明旦天明にして敵艦隻影なし。

(五) 大快事



忽必烈が第一の日本征伐が此の如くにして失敗に歸し、我は大捷を宗廟に告げ、竹帛は文永の役として永く後昆に傳へぬ。然れども忽必烈は此の失敗を以て懷抱する野心を抛ち去る能はず、彼れは猛然として再度の舉を謀らんと欲し、復た杜世忠、何文著等を使者として、高麗より長門室津に至る、大宰府は之れを鎌倉に護送せり。幕府は、已に前度に於て彼れの無禮にも兵艦を以て我が邊海を侵掠し、開戦を宣布したるを憤る、今に及んで何ぞ猶豫すべき。直に使者五名を龍口に斬つて其の首を梟し、鎮西諸國に令して沿海の守備を嚴にせしめ京師大番兵を停め、公私の費を節減して軍費に資し、盛んに兵備を修むると同時に、曩に蒙古襲來の際に於て進鬪せざるものを責め、爾後若し此の如きものあらんには罪科に行ふべきを嚴令せり。

讀 史 感

幕府は此の如く戦備を修めて、國防を嚴にすると同時に、明年三月を期して高麗を征伐するの策を決し、令を太宰府に下して、舟師舵手を準備し、直に徵發し得べからしめたり。此の時に於ては鎌倉幕府の意氣強勢なる、眼中元軍なく、其の再寇の如きは物の數ともせざりしなり。

斯くて兵馬倥偬、羽檄旁午の中に歲月は流れ去りて、早くも弘安四年となり、忽必烈は前度に増したる戦艦と軍隊とを以て再び日本征伐の舉を敢へてしたり。

元將忻都、洪茶丘及び韓將金方慶、金周鼎等は四萬人、戦艦九百艘を以て合浦を發し軍容甚だ盛、誓つて前度の失敗を回復せんとするに似たり。高麗軍は先づ壹岐を侵犯し、元軍は志賀島、能古島に上陸せり。別に范文虎の一軍あり、船艦三千五百艘、兵十餘萬を以て

讀 史 感



到り、筑紫の海上は盡く船艦を以て掩はれ、帆檣の林立は、秋山の葉落ちて骨現はなるに似たり。我が沿海警備の將士は、此の目に餘まる大敵を見て、意氣愈々奮昂し、我神州の寸土たりとも夷狄の鞋底に汚さしめずと叫び、敵の來るを待たず、我より撃ち入る者も少からざりき。

先づ一ばんに天草の大矢野十郎、同三郎、二艘にて夜打して、異國船に乗り移り、首二十一とりて船ともに火をつけて歸りける、退て其の火を願れば、四五艘に燃え付きて、數多の賊とも亡びけんと見ぬぬ(中略)伊豫國住人河野六郎通有異賊退治の爲め本國を立ちし時、十年のうち蒙古よせ來らずば、異國へ渡りて合戦すべき旨起請文をかきて、氏神三島社に誓ひ、それを焼て灰を飯て、此の八個年まで待とて今その時得たりと勇みたちて兵船二艘を以

て異賊の中へ押し寄す、蒙古も待受けて射合ひけるに、蒙古か放つ矢に屈竟の郎等四五人射ふせられ、たのむ處の伯父も手負わか身も石矢に左の肩をつよくうたれ、弓引べきにも力及ばねば、片手に太刀を提さけ、帆柱を切つて船にわたしかけ、乗移りて散々に切りめくり多くの敵のあたまを切りとり、又其中に大將と覺しくて玉冠きたる大男を生捕て、前にしめつけでぞかへりける。(八幡

悪童記)

此の如きは獨り河野通有のみにあらざりしならん、我が軍勢は自ら天祐のあるべきを信じ、奮闘挺身只其及ばざらんを恐たり。是より先き元軍の再び我を侵さんとするの風説聞ゆるや、龜山上皇は深く軫念あらせられ、親から石清水八幡の祠に詣でられ、黙禱あらせらるゝこと一夜、宣命を伊勢大廟に奉じ、死を以て國家の大難に代ら



威 史 記

んを祈らせ給ひぬ。天争で我が國に福せざるべき、勇猛の將卒元軍と海陸相對峙する間に、一夜大風雨は忽然として天地を晦冥にし、萬丈の濁浪は空を排して四崩し、數萬の船艦は落葉の秋風に翻へるが如く、帆破れ檣折れ漂蕩往く處を知らず、元將は遁逃し元兵は溺死、殘兵は鷹島に其の餘喘を保ちたるも、我軍掩撃して之を殺し、十萬の元軍、生還するもの僅に三人、此の如くにして忽必烈が再度の企畫も失敗に終り、我が國威は三韓、禹域を震懼し、遂に忽必烈をして我が國に對する野心を抛たしめぬ。時に弘安四年七月朔。此の事己に竹帛に傳へて、後人をして祖先の偉功を欽仰せしめつゝありと雖も、之を外人の口より聞くも亦一興なきにしもあらず。日本征服の目的を達せんが爲めは、アツバカタとボンサンシンの二將に命じ、戰艦軍隊を率ゐて、出征せしめたり、彼等はザイタ

威 史 記

いとキンサイとの二港より出帆し、黄海を横斷し、海上事無うして該島に達せり。然れども兩將相猜疑し、互に其の計畫を輕侮し、之れが爲めに野と村とを攻畧したるも、都市の壘砦を取る能はず、而して彼等守ると頗ぶる固く降伏を肯んせざりき。然かも遂に之れを抜きて敵を盡く刎ねたるに、其の中の八人は如何にするも斬ること能はず、之れ彼等は腕の肉と皮との間に、外見せざるまで小石を挿めり。此等の石は魔法を以て呪へるものなりき。是れを發見したるが爲めに、棒を以て之れを撲殺したり。此の時に當りて北風激烈に吹き起れり。韃韃の船艦は海岸に漂蕩して四離八散せり。暴風は益々吹き荒みて、船艦の多くは覆没し、軍隊は飢餓に瀕しつゝ、日本の海岸を距ること凡四渾の沖に横はる處の小島に漂著し、他の船艦にして海岸を距る遠からざる海上に在りしも



のは、暴風の困難を免かれたるを以て、二將は重なる士官と共に本國指して逃れ去れり。島に残りし鞆靴人は凡て三萬人ばかり。彼等は飢餓に逼ると雖ども、去るに船なきを如何せん。捕虜たらんか、死せん乎、他に免るゝの道なきに至れり。(Marco Polo's Travels)

是れマルコポロが彼れが旅行記に記したる一節なり。彼れは尙ほ元軍が奇計を設けて都府を攻畧したるの事實を記したれども、妄にして信するに足らず。彼れ固より元軍に従ふて來りしものにあらず、從軍したる兵士の談話によりて記したるが故に、其の妄誕なる怪しむに足らず。而かも、元軍が一夜に覆没して、十萬の兵歸るもの僅に三人なりし的事实は、如何なる史家も之れを逸する能はざるを見る。吾人は元寇の事を案じ、記して茲に至り、我が祖先が愛國の赤誠と

護國の精忠とを感謝せざるを得ず。今や世界列強のひと干戈を交ゆ古を以て今の鑑と爲さば、庶幾くは過ち無らん乎。

筑海颯氣連天。黑蔽海而來者何賊。蒙古來。來自北。東  
西次第期吞食。勝得趙家老寡婦。持此來擬男兒國。相  
搗太郎膽如囊。防海將士人自力。蒙古來。吾不怖。吾怖  
關東令如山。直前研賊不許顧。倒吾橋。登虜艦。擒虜將。  
吾軍喊。可恨東風一驅附大濠。不使續血盡。存日本刀。

(賴山陽)

### 足利と豊臣との外交

……國民對外の教訓……

弘安の役に於ける我が軍の大勝は、國民をして敵愾心と自尊心とを



昂騰せしめたり。蒙古軍の損傷は、我が史家の記する如く大ならざるにもせよ、之れが爲めに忽必烈をして再征の雄心を阻止せしめ、我が國民をして武力の外に天佑あるの神國たるを自覺せしめたり。されども是より以往、我が國民の對外的雄心は、益々發揚さるべき筈なるに、北條に代りて天下の執權たりし足利に至りて、何ぞ圖らん日本國王と稱して、明の正朔を受くるの拙策に出でんとは。左の文書に見よ。

日本准三后某

上書

大明皇帝陛下、日本國開關以來、無不通聘問於上邦、某幸秉國鈞、海內無虞、特遵往古之規法、而使肥富相副祖阿通好、獻方物、金千兩、馬十匹、薄樣千帖、扇百本、屏風三双、鎧一領、筒丸一領、劍十腰、刀一柄、硯筥一合、同文臺一個、搜尋海島漂

寄者幾許人、還之焉、某誠惶誠恐、頓首、頓首、謹言、是れ即ち我應永八年にして、後小松天皇の御宇、明の建文三年なり。史を案ずるに當時執權たるもの足利義滿にして、彼れは初めて使を明に遣はしたるものなれば、其の准三后某と云へるは、即ち義滿の事なるべし。此の書に對して明主は如何に答へし乎。

天承運

皇帝、詔曰、覆載之間、土地之廣、不可以數計、古聖人疆而理之、於出貢賦力役、知禮義、達於君臣父子大倫者、號曰中國、而中國之外、有能慕義而來王者、未嘗不子而進之、非有他也、所以下以率天下、同歸中善道也、朕自嗣大位、四夷君長朝獻者、以十百計、苟非反大義、皆思以禮撫柔之、茲爾日本國王源道義、心存王室、懷愛君之誠、越波濤、遣使來朝、歸通流人、貢寶刀、駿鳥、甲冑、紙硯、



副以良金、朕甚嘉焉、日本素稱詩書國、常在朕心、第軍國事殷、未暇存問、今王能慕禮義、且欲爲國敵愾、非篤於君臣之道、曷克臻茲、今遣使者道葬一如、班示大統曆、俾奉正朔、賜錦綺二十四匹、至可領也、嗚呼天無常心、惟敬是彝、君與常好、惟忠是綏、朕都江東、於海外國、惟王爲最近、王其悉朕心、盡乃心思、恭思順、以篤大倫、母容遁逃、母縱姦宄、俾天下以日本爲忠義之邦、則可名于永世矣、其敬之、以貽子孫之福、故茲詔諭、宜體眷懷、

建文四年二月初六

勿論武臣權を執り、皇室式微、國民羈府あるを知りて、皇室の在るを知らざるの時代なれば、自ら國王と稱するが如きは、當時の事情として有り得べき事なれども、其の正朔を受けて怪します、臣下の待遇を受けて恬然たりしが如きは、是れ豈に卑屈陋劣の心事にあらざる無きを得んや。

或は曰く、當時物質の輸入を爲さんが爲めに、政略として此の如き書を贈り、此の如き書を受けたるものならん。或は曰く、當時讀書人は多く僧侶に在りて、武人は多く無學なりしが爲め、僧侶の爲めに誤まれたるものならん。足利時代に於て永樂錢を得て通貨としたるは事實也。明製の諸器物、書畫を以て殿閣を裝飾したるは事實也。然れども斯くの如きものを輸入せんが爲めに、臣を他邦に稱するが如きは、日本の執權者として爲し得べき事にあらざる可し。明國に學びし僧侶が、自家の都合を宜しうせんが爲めに國體に關すべき文書を作爲したるに對し、如何に武人が無學なるにもせよ、之れを知らざるまでに無學にはあらざりしなる可し。吾人は當時の執權者に對して疑なき能はず。後來碩學の儒をして東夷を稱せしめたるを見れば、當時或は辭を卑うして臣と稱したるも知る可からず。



吾人は此の文書を読み、次に豊公が朝鮮國王に送りたる書を読み、多少の感なくんばあらず。

日本國關白秀吉、奉書

朝鮮國王 閣下、

雁書薰讀、卷舒再三、抑本朝雖爲六十餘州、比年諸國分離、亂國網廢、世亂而不聽朝政、予不勝感激、三四年之間伐叛臣、討賊徒、及異域遠島、悉歸掌握、竊按事跡、鄙陋小臣也、雖然予當於托胎之時、慈母夢日輸入懷中、相士曰、日光所及、無不照臨、壯年必入表聞仁風、四海蒙威名者、其何疑乎、依有此奇異、作敵心者、自然摧滅、戰則無不勝、攻則无不取、既天下大治、撫育百姓、憐愍孤獨、故民畜財足、士貢萬倍千古矣、本朝開關以來、朝廷盛事、洛陽壯觀、莫如此日也、夫人生于世也、雖歷長生、古來不滿百年焉、鬱々久居此乎、不屑國家之隔山海之遠、一超直入大明國、易吾朝之風俗於四百餘州、施帝都政化於億

萬斯年者、在方寸中、貴國先驅而入朝、依有遠慮、無近憂者乎、遠島小邦在海中者、後進者不可作許容也、予入大明之日、將士卒臨軍營、則稱可修隣盟也、予願無他、只願佳名於三國而已、方物如目錄領納、珍重得齊、

天正十八年仲冬

日本關白秀吉

快男兒、快男兒、彼れが面目楮表に活躍し、意氣九天を衝くの概あり。其の事跡、卑陋小臣也、と白狀し、一超直入大明國、と放言したる、彼れにあらずんば言ふ能はざる也。

大明勅使に報告すべき條目として、彼れが諸將に交付したる書も亦た同一の氣焔を吐きぬ。

對大明勅使可告報之條目

大日本者神國也、神即

天帝、天帝即神也、全無差、依之國俗、帶神代風度、崇王法、規天則、地育令、



雖然風移俗易、輕朝命、英雄爭、權群國分崩矣、予懷胎之初、慈母夢日輸入胎中、覺後驚愕、而召相士筮之、曰、天無二日、德輝彌綸、四海之嘉瑞也、故及壯年、夙夜憂世愛國、再欲下復

聖明於神代、遺威名於萬代、思之不止、終歷十有一年、族滅凶徒姦黨、而城攻無不、拔國邑無不下、有乖者自消亡矣、已而國富家娛、民得其處、心之所欲、無不遂、非予力、天之所授也。

天に二日なしと喝破し、神授なりと云ふ、彼れ已に四海を曠うせり、眼中豈に明國あらんや、之を彼の辭を卑うして臣を稱するに比する、固より天壤の差のみにあらざる也。

要するに元弘に於ける敵愾心は、足利に至りて委靡し、豊公に至りて振興せり。是れ時勢の變乎、抑また人に依る乎。

絶海樓船震大明。寧知此地長柴荆。千山風雨時時  
惡。只作當年叱咤聲。

(物茂卿)

### 天正年間奥羽史の片影

……相馬義胤の一生……

(一)

若し旅客の奥の中村に入り、馬陵の城趾を訪ふものあらば、大手の古門を過ぎ、左右の高堤に沿ふて老幹蟠屈せる幾株の巨櫻樹を見るべし。中に就いて參差たる枝條の、北を指して蔓くる一個の巨樹を見るならば、必ずや異様の感に打たらるゝならん。此の奇なる老櫻樹に附す



るに外天櫻の名を以つてし、風雨星霜幾百年、古老の傳へて一種の歴史的說話は、今に残りて旅客の眼底に新たなり。

何故に外天の名を以て此の老櫻樹に命じたるか、吾人は之れに就いて、歴史上興味少からざる事實を古老に聞けり。

外天とは何ぞ、相馬義胤の別號也。此の老櫻樹は即ち義胤が手栽にして、其の枝條の北を指せるは、彼れが八十年の生涯、總て彼の獨眼龍と綽號せる伊達正宗と相争ひ相攻伐したるが爲めに、彼れの生涯を終りたる後に在つても、手栽の櫻樹は彼の英魂を留めて、長へに其の遺志を表白しつゝありとは、また是れ古老の傳説也。想ふに此の傳説たる、一種の神話的材料に過ぎずと雖ども、吾人は之れに依りて、彼の義胤が、如何に當年の老雄と相争ひ、相顔頑したるかを知る。

説 史 感

伊達政宗の白河關外に威を振ひたるは何人も知る處にして、正史は皆な彼れの名を傳へざるはなし、而かも掌大の地に據りて此の老雄と相争ひ、彼をして其の志を得る能はざらしめたる相馬義胤の事跡に至つては何人も傳ふるなく、正史も亦た其の名を逸せり。彼の獨眼龍が豪族蘆名を滅ぼし、近隣の諸豪を降伏せしめ、其の領土を蹂躪するに當つて、兵を用ゆる鬼神の如く、彼れをして和を議するの止む能はざるに至らしめたるは相馬義胤也。豊太閤の雄圖四海を蓋ひ、兵を鷄林に用ゆるに當つて、其の策源地なる名護屋に赴き、韓嶮に參したるも相馬義胤也。石田三成をして智勇兼備の良將と嘆せしめたるも亦た相馬義胤也。嗚呼彼れが手栽の櫻樹は、幾百年の春風其の芳艷を放つて今日に薰郁たるも、彼れの名は古老の傳説に残るのみ。正史記さず、人間はず、花若し靈あらば、必ずや世の無情に

説 史 感



泣かん。

相馬義胤とは如何なるものぞ、先づ彼れの系譜より見ん。

相馬師常

千葉介常胤の二男頼朝に従つて軍功あり文治年中泰衡の征討の時功によりて奥州行方郡に封せられ八幡大菩薩の御旗を授けらる

義胤

胤綱

承久の兵亂に泰時に屬し父子三人宇治川を渡る

胤村

胤氏

重胤

義史記

元享中總州相馬より奥州行方郡小高の城に移る此時行方、宇多、伊具、亘理の四郡を領す將軍尊氏に屬して軍功あり其後建武三年鎌倉法華堂下に討死す

親胤 出羽守

觀應二年奥州東海道守護職に補せらる

胤頼

治部少輔後に讃岐守に任せられ功ありて奥州の内宮城郡、國分郡、名取郡、坪沼郷、増田郷、黒川郷并に羽州の内所々を賜はる

憲胤 治部少輔

胤弘 讃岐守

重胤 治部少輔

義史記



高胤 出羽守

盛胤 大膳大夫

顯胤 讃岐守母は會津盛舜の女

盛胤 彈正大弼母は伊達種宗女

義胤 長門守母は伊達義宗の女

彼れは實に相馬の高祖たる師常より十六代の孫なりき。而して彼れの母は伊達より來り、彼れの室も亦た伊達より來りき。彼れは伊達とは最も親近なる姻戚なりし也。然るにも拘はらず彼れの干戈を動かして、雄を政宗と争ひたるは何ぞや。

當時は則ち戰國時代也。應仁以降海内紛擾し、風雲飛騰し、强者は弱を呑み、勇者は怯者を威し、政綱なく倫常なく、威力の大なるものは將たるべく、俟たる可かりし也。況んや勿來關外は春風竹つて

説 史 感

説 史 感

源家の白旗を吹いてより、落花の鎧袖に點するなく、殆んど皇土以外に閑却されたるに於てをや。然らば即ち義胤の政宗と争ひたるもの、互に倫常を没却して骨肉相噬みたるなるか、否、彼れは一片俠骨の稜々なる英雄兒、焉ぞ其の亂世なるが爲めに倫常を没却するの無謀者ならんや。彼れは實に強の弱を虐ぐるを見るに忍びず、且つや父祖が將軍より受領したる封土の、伊達に横奪されたるを憤り、之れを取り返さんが爲めに、大義、干戈を執りたる也。

蓋し政宗の志望たる、近隣の豪族を一掃し、白河關外に一大領土を建設せんとしたるものなりき。豊太閤は關西を統一したりと雖も、未だ以て武威を白河關外に加ふる能はざりき。彼の小田原を征せんとするに際し、十字架を負ひて擲擧したるは政宗にあらずや。「久待扶搖萬里風」と浩歌したる彼れ、その天下を有する能はざるを見たる



が爲めに、早く白河關外を一統せんとしたるは、彼れが隣國に加へたる攻伐の事實によりて明かならん。義胤は早く已に政宗の大志を見しなり。故に彼れは自家の領土を保護するのみならず、此の無名の攻伐を弱者に加ふを見るに忍びずして起ちたる也。彼れ豈に伊達の姻戚たるを知らざらんや。姻戚と相争ふの不可なるを知らざらんや。實に天性の俠骨は抑ゆるも能はず、已むを得ずして干戈の間に相見たる也。彼れ豈に妄りに戦を好まんや。

當時相馬を圍繞したる豪族は總て七、曰く伊達、曰く岩城、曰く佐竹、曰く蘆名、曰く田村、曰く四本松、曰く二本松。伊達は其祖米澤城に住し政宗に至りて仙臺に移り、岩城は岩城に城主となり、佐竹は常州水戸に居り、蘆名會津に城主たり。田村は三春を領し、四本松は仙道小濱に在り、二本松は本性岩松にして、國詮に至り二本松

の城主たり。此等豪族の關係如何を探尋するときは、伊達と相馬が姻戚たるのみならず、七個の豪族は恰かも蛛網を張りたるが如く、舅たり姑たり、兄たり弟たるの關係を有したりし也。然るに政宗は秦皇の勢を以て六豪を統一せんと試みたり。義胤は父祖の遺業を繼承し、義の爲めに彼れが八十年の生涯を干戈に送り終んぬ。

## (二)

吾人は相馬義胤の一生を叙するに先だちて、應仁以後に於ける白河關外の形勢を叙するの必要あり。之を叙するには義胤の父祖及び政宗の父祖たる諸將が如何なる關係ありし乎、其他の諸豪が如何なる状態なりしかを説かざる可らず。而して吾人の本旨は相馬の藩主たる義胤の一個を説くのみにあらずして、之を中心として當時の歴史



——伊達政宗の諸豪征服の狀態——を探討せんと欲するに在り。  
 相馬顯胤は義胤の祖父にして、其の室は伊達種宗の嫡女なりき。彼  
 れは當時知勇兼備の良將として其の名隣國に高かりし。此の婚儀あ  
 りてより、相馬と伊達とは其の交情に於いて水魚の如く、種宗は其  
 の女の爲めに良配を得たるを喜び、之れに信賴する殆んど自己の子  
 の如く深きを加へぬ。彼れは其の子晴宗の配として岩城重隆の女を  
 得んとし、顯胤に委するに伐柯の囑を以てす。顯胤は外舅の委托固  
 より辭すべきにあらず、彼れは使を以て重隆に告ぐるに求婚の事を  
 以てせり。重隆は此の要求に對して喜んで曰く、伊達は名門にして  
 當時威名隆盛なるもの、之れと婚を結ぶ家門の慶事也、只一事の以  
 て望むべきものあり、我に世子として領土を繼承せしむべきものな  
 し、故に我女にして男を生まば、之を岩城の世子たらしめんと。顯

## 感 史 讀

胤此の報を得て種宗に通じ、大永四年を以て結婚の約を定めぬ。伊  
 達及び相馬は此の約の成立によりて喜べり、永く平和の關係を持續  
 して、人民堵に安ずべしと。何ぞ知らん此の喜ぶべき成約は、遂  
 に三家をして相反目し、兵馬の間に相見え、白河關外に於ける諸豪  
 の平和なる關係を、破壊するの惡遠因たらんとは。  
 流言あり、岩城重隆の其の女を伊達に送らんとするは一時の奸計に  
 して、其の本旨は白川と結婚せんとするに在りと。顯胤は此の流言  
 を聞いて少からず驚けり。彼れは直ちに問者を送りて其の實情を確  
 めんとせり。其の結果は實に意外なる報告を得たり。流言は風説に  
 あらずして實事なりき。岩城は何故に變心せしか。伊達と婚を結ぶ  
 も彼れは遠境也、緩急の期其の援を得ること難し、寧ろ其の隣境な  
 る白川と親を厚うし、以て彼我相援ふの便なるには如かず、是れ重

## 感 史 讀



隆が破約したる理由なりき。重隆は到底智謀の主にはあらざる也。顯胤は遂に伊達に對して委托の責を全うせんが爲めに、岩城に對して戰を宣言せざる可からざるに立ち至れり。彼れは世の嘲を招き武道の名折たらんを恐れ、彼れは直ちに出戰の命を臣下に降せり。江井河内なるものあり、諫て曰く、重隆は武功に練熟したる老將、已に此事あらんを知りて、國境の守を堅うしたるや必せり。我れは地理に暗く、懸軍の勢、利鈍の繋る處知るべし。故に成敗に至つては豫め期す可からざるものあり、如かず時機を見て不意の討伐を加へんにはと。顯胤怫然色を作して曰く、夫れ戰は將卒の和不和に在り、何ぞ多少に在らん、重隆の亡國を待つに暇あらずして我死なば如何、汝何ぞ重隆を恐るゝの甚しきやと。彼れは起坐直に進軍の令を傳へ、宣して曰く、顯胤義に仗りて不義の重隆を討す、若し命を用ひざる

ものあらば是より去れと。彼れは三百餘騎を従へて富岡城に進撃したり、彼れは此の時漸く十八歳の少年なりき。富岡城を碎く恰も累卵に磐石を加ふるが如きものなりき。勢に乗じて長驅し、木戸の宿を破りて猶ほ南せんとするに當り、脆くも伏兵に陥りぬ。顯胤力戰すと雖ども士卒を失ふ少からず、一たび退却し、新山城に入りて再舉を謀れり。此時に際し伊達種宗使を馳せて曰く、重隆の無道を膺懲せんが爲め軍を起さる、其の義深く謝する處也、彼れに對するの積憤我も亦た消する能はざるものあり、希くは士卒を送りて其の後援たらしめんと。顯胤答へて曰く、後援を送らるゝの厚意謝するに餘りあり、然れども顯胤の爲めに不義を憤り、生死を共にするの士卒尙ほ健在せり、彼れを亡ぼす掌を反すべからず、只戰事を視察するの士あらば、



來つて顯胤が如何に戦を爲すかを視せしめよ。彼れは斯くして再たび新山城を出で、進軍せり。一軍新山城を出づるや、前轍の覆に鑑み、正々として進みぬ。先づ長澤、岩澤の間に在りたる敵を敗り軍を二となして一は山道を取り、他は海岸に沿ひ、兩軍相應し、堅甲利兵、無人の曠野を行くが如し。斯くして岩城重隆が居城なる白戸の城に肉薄したり。

重隆は狼狽せり、而かも如何ともする能はず、寺僧二人をして愁訴せしむる處ありき。顯胤の曰く、我固より戦を好むにあらず、重隆の不義によりて止むなく事の此に至りし也。若し息女を我に贈りなば戦を止めんと。重隆は理と力と兩ながら抗すべからざるを知り、其の言の如くにして和を講せり。顯胤は直に使を伊達に遣はし、戦勝つて息女を伴ひ來れり、前約の如くせんか、將た岩城へ返すべきか、

識 史 感

そは意の儘也と。種宗は此の義あり信ある顯胤の行動に感じ、約の如く晴宗の配となしぬ。戦によりて攻略したる岩城の各城をば、盡く還附し、只後患を慮るが爲めに富岡の一城を取りにき。斯くして平和は回復されぬ。

顯胤は此の如く外舅に對して其の責任を盡し、存亡を略して酬ゆる所あり、種宗争でが歡喜せざらん、彼れは益々顯胤に倚信するは後世子孫の利益なりと思ひ、今や其領地の、相馬領に接續する一部を割いて顯胤に贈らんとせり。譜代の老臣は反對せり、曰く顯胤公は女婿なり、之れに贈るに金銀財寶を以てする固より不可なし、然れども領地に至つては伊達家祖宗の國土、他に割讓するに忍びざる也、且つ夫れ顯胤公未だ弱冠ならざるに老雄を以て自ら居れる岩城重隆と相争ひ、僅かに三百餘騎を提げて重隆を屈せしめ、武名盛に技倆



超群也、若し將來に於いて伊達と相馬と變を生ずるならんには、伊達家の滅亡知るべきのみと。種宗は遂に其の志を行ふ能はず、而かも顯胤を愛すること甚しく、是れが爲めに遂に復た亂階を啓くに至れり。

讀史感

晴宗以爲らく、父の顯胤を愛すること其の度に過ぎ、臣下の諫言を聞かざるは是れ子孫を顧みざるの所爲也、若し此の如くにして將來に至らば、伊達の國土を擧げて相馬に附庸たらしむるも知る可からず、如かず今日に於いて早く計を爲さんにはと、彼れは遂に父種宗を桑折城に幽したり。彼れは此の幽居にあつて顯胤を思ふこと深く、其室に對して窃かに書を送れり。書中に言へるあり晴宗不幸にして幽閉せらる、願くは顯胤の心を以て晴宗の心を和らげ、我をして心神の安怡を爲さしめ

よと。顯胤之れを聞くや、其の外舅の爲めに悲しみ、伊達家の爲めに之れを惜しみ、熱心に理非曲直を擧げて晴宗に言ふ處ありしと雖も、隆宗の幽閉は其の原因實に顯胤に在り、晴宗何ぞ之を肯んせんや。

顯胤は口舌を以て争ふの利なきを知り、彼れは意を決して岳父を奪はんことを策せり。而して伊達と相馬と鬩端を啓くの情勢を致せり。

(三)

顯胤は伊達種宗の幽閉を見るに忍びず、之れを奪はんとして老臣に諮ふ處ありき。老臣等は曰く、晴宗已に子たるの義を失して其の父を幽す、到底尋常の策の行はるべきにあらず、一舉桑折城を攻圍して成否を勝敗の後に決するに如かずと、然れども顯胤の深慮は之れ



を否認せり。彼れ曰く、身苟くも伊達の姻戚たり、而して暴に出づるものは隣國の誼と云ふ可からずと。彼れは其の臣下なる草野肥前に命ずるに種宗を救ふべきを以てす肥前命を受けて西山城に向ひ、一夜風雨に乗じて種宗の幽房に入り、種宗と其の扈從とを救ひて掛田の城に入りき。當時掛田は種宗の叔父義宗の居城たり。西山城中は驚愕せり。種宗の在らざるに驚愕せり、然れども其の掛田の城に入るを聞くや、直ちに數百の兵を發して之を圍みぬ。義宗兵寡くして如何ともする能はず、使を發して急を顯胤に告ぐ、顯胤報を得て之れに赴く。伊達晴宗も來つて對陣し兵端茲に啓かんとせり。然れども事、父子に關し、争ひ姻戚にかゝる。互に協定商量する處あり、種宗を越川に移すに決して、漸く落著したり、左れども是れ實に暫時なりき。晴宗は再び種宗を桑折城に移して監視愈々嚴

讀

史

感

なり。義宗之を聞いて憂慮措く能はず、使を顯胤に遣して訴ふる處ありにき。顯胤報を得て老臣を會し、宣言すらく、晴宗父子の義を蔑如して協約を變せり、是れ豈に等閑に附し去らんや、我は是より問罪の師を發せんと欲すと、彼れは此の旨を以て義宗に答へぬ。義宗大に喜び、直ちに食糧供給の準備を爲せり。而して顯胤百餘騎を率ひて小高の城を出で、急遽掛田に向ひ、先づ使をして晴宗に言はしめて曰く、違約の旨を問はんが爲めに來れり、願くは其の理由を陳べられたしと、而かも其の返答は要領を得ざりき。顯胤は遂に兵馬の間に相見るの己むなきに至りしを看取せり。斯くして伊達と相馬との間に釁端は開かれたり。晴宗は八百餘騎を率ひて大森に出でぬ。而して意外なりしは岩城の伊達を助くるなりき。茲に於てか伊達と相馬との争端は直ちに岩城と相馬との争ひと

讀

史

感



なりぬ。岩城の伊達を援けたるは思ふに前度の恨を酬いんとするに外ならざる也。

顯胤は到底平和の破壊せざる可からざるを知るが故に、彼れは機先を制するの策に出で、天文十一年二月九日掛田の陣を撤して、晴宗の陣せる大森に向つて進撃したり。晴宗銳を悉して拒戦すと雖も遂に敵する能はずして、米澤に退けり。顯胤も亦た掛田に凱旋したるも、未だ其の目的を達せざるが故に、五月下旬には百八十騎を率ひて桑折城に向つて進發し、以て種宗の救援を策せり。

顯胤の威名已に敵を歴す、到る處磐石の累を歴するが如く、直に桑折城に入りて種宗を救ひたり、斯くの如く顯胤は義に仗りて伊達と兵端を開き、岳父の憂愁を排除したりと雖も、伊達との憤怨は其の端を茲に發し、後來解く可からざるに至れり。

## 讀

## 史

## 感

伊達種宗は其の婿顯胤の義によりて、幽囚を脱して小高の城に在り、而るに晴宗も鑑みる處ありしか、彼れは其の父の他國に在るを耻辱として、老臣と相謀り、種宗を迎へんことを要求し來れり。彼れは血判の誓約書を送れり、老臣は之を携へて他意なきを辯解せり。顯胤も亦た強ゐて之を止むるを欲せず、曰く、今日あるに至りしは晴宗の義に反きたるが爲めのみ、我豈に強ゐて岳父を抑留せんやと。是に於てか双互の約成りて種宗を伊達に送還せり。種宗の國境に入らんとするや「對相馬。伊達七代勿引弓」と石に書しにき。然るに後年此の遺訓の石は失して、伊達と相馬との紛争已む時なかりき。顯胤は天文十八年、四十二歳にして没し、嫡盛胤繼げり。彼れの室は伊達義宗の女なりき。是より先き亘理武石なるものあり、相馬と其の祖を同じうすと雖も



一個の豪族を以て自ら任じ、伊達に依らず、相馬に傾かず、隱然として伊達と相馬の權衡たりき。而して武石の没するや其子猶ほ襁褓の裏に在り。老臣議して曰く、今や天下亂る、幼主を擁して領地を保全せんこと難中の難也。故に其の依る處を求めざるべからずと。然るに家臣を會して伊達に依らんか、將た相馬に依らん乎二者一を撰ぶの議を提出したるに、伊達に依るべしと主張するものと、相馬に依るべしと主張するものとの二論を生じたりき。其の結果は事大主義勝を制して、伊達に依るは亘理將來の得策なりとて、遂に伊達に附屬して、其の擁護を得んことを通じたり。是に於いてか武石以來兩豪の權衡たりしものは、全く其の重點を變じて伊達に加はるゝに至れり。

相馬は亘理を以て北方の屏障となしたりき。何となれば伊達にして

相馬を攻畧せんとせば、先づ亘理を攻畧せざる可からず。然らざれば亘理は常に嚴正中立を爲して、師を通ずるの路さへも假さざりしが故也。一旦亘理の伊達の擁護に依るに至りては、北方の屏障撤去せられたるものにして、相馬は遂に晏然たる能はざる也。斯くして晴宗は近隣諸豪の征服に力を用ひ、西は蘆名と爭端を啓き、南は岩城と連衡して西より、亘理と合縱して北より相馬を攻畧せんと試み、兵禍連年息まず、而かも顯胤の後を繼ぎたる盛胤は、其の父より受けたる智勇の資を以て、南は田村に説いて嚴正中立を守らしめ、自ら兵を督して西北の國境を守備し、以て此の攻畧を支わたり。時は是れ永祿六年七月、伊達は已に亘理を得て、南境の障碍玆に撤去されたるを以て、一舉相馬を討滅せんとし銳を悉して南進を開始せり。彼れは先づ海によりて兵を尾濱、原釜に上陸せしめて其の左翼



となし、中堅は街道よりして駒が峰を過ぎ相馬へ進撃し、右翼は九森に在りて敵の逆撃に備へり。然れども中堅は相馬勢が決志の拒戦によりて進むことを得ず、其の功を奏すべきものは只左翼の進發軍なり。

盛胤が此の急報に接し、直ちに見兵二百を率ゐ、北境に赴き、敵の南進を支えんとしたり。此の戦端は顯胤以來伊達と兵を交へてより、始めての大戦にして、洵とに相馬が存亡の運命は、此の一戦の成敗に繫れり。此の存亡の巷に立つて、伊達勢をして其の兵を用ゆる神出鬼没なるに驚かしめたるは、盛胤の一子義胤なりき。彼れは當時年僅に十六、後年外天公として、獨眼龍を驚嘆せしめたる大伎倆を早く已に此時に於て發現したりき。彼れは父と共に國境の難に赴き、其の最も優勢なりし伊達の左翼に向つて攻撃を試みたり。伊達勢は

此の迅雷的攻撃の爲めに、盡く勇將を失ひ、遂に占領地を保つ能はざるに至つて退却せり。有力なりし左翼已に此の如し、中堅争でか支え得んや、彼等は其の志を得ずして退軍せり。

元來伊達勢の突如進撃を試むるに至りしは、決して理由なきにあらす。盛胤の臣にして黒木中村と云ふものあり、彼れは寵遇を其の主を得、北方の鎮臺として中村城を守れり。彼れは伊達の大國を有し、後年相馬が遂に其の併呑を免かる能はざるを憂へ、利害を算して欸を伊達に通じ、以て自家の安全を計らんとしたるに外ならず。而かも其の計成らずして身首其の處を異にせり。義胤は出でぬ。彼れは實に伊達が諸豪を併呑に抗せんが爲めに出でぬ。



## 感 史 談

顯胤より盛胤に至るまで、伊達は海道を占領せんとして銳を相馬の國境に集め、攻守殆んど寧日なく、岩城、田村、三春等の諸豪ありと雖ども、皆な是れ羊豚の群、兩虎の奮闘を觀望して其の何れか勝利者ならんには、其の勝者に向つて首を垂れ尾を搖かさんとするもの似たり。而かも伊達は諸豪を征服して白河關外に一大領土を開かんが爲めに攻撃し、相馬は其の野心を抑制せんが爲めに拒守したるもの如し。同じく是れ干戈を執りし。雖ども、其の意義に於いては兩者相異なる自ら涇渭あり。

顯胤より盛胤、盛胤より義胤、其の精神は終始一貫せり。而して義胤の時に至りては、伊達の壓力愈々加はりぬ。

義胤の世に出でたる時には、伊達は輝宗の代となり、其の子政宗韜略あり、其の兵を用ゆる父の及はざる處、四方經畧の策は總て彼れ

## 感 史 談

の手によりて劃せられたり。而して伊達が經略に反對して其の志を得ざらしめたるは義胤なりき。若し義胤にして存せんか、相馬にして其の領土を保有しあらんか、何の日か能く其の經畧の志を達せんや、伊達の相馬に向つて全力を悉したるも所以なきに非ざるを知る可し。

日より日、月より月、年より年、干戈殆んど止む時なく、環視の諸豪も遂に傍觀の不可なるを認めぬ。其の攻守の意義に於いて相異ありとするも、兩虎相争うて一山震ふ、彼等は何人が勝利者たるも禍は直ちに自家の頭上に落ち來らんを恐れたる也、是に於てか、諸豪は相會して伊達、相馬の調停策を講じぬ。時は是れ天正十一年、京畿の地は兵馬倥傯、干戈紛然たりき。

先づ使を送りしは、佐竹義重、岩城常隆、田村清顯の三豪なりき。



其の主旨は伊達、相馬本と親族にかゝる、而して干戈相結んで釋けざるは是れ親を亡みする也、宜しく和親して、領民を堵に著かしめよと云ふに在りき。其の和睦の條件として、相馬をして攻畧したる伊達の丸森、金山の二城を返すべきを以てせり。義胤其の使を見て曰く、調停の旨我れ諒せざるにあらず、而かも我が干戈を動かす所以のものは親あるにあらず、情あるに非ず、義の無みする能はざるを知ればなり。丸森、金山は父祖の攻畧したるものにして、子として之れを返し去る、是れ父祖に背く也。伊達にして其の非を悟り和議の意あらんには、今日の儘にして可なるべし、何ぞ必ずしも領土を得るの必要あらんやと。使者歸り報じぬ。和議の妥協は到底使者によりて成し能はざるを看取したる田村清顯は、彼れ自身義胤の許に來りて、切言する處ありにき。義胤も其の志望の切なるを如何と

感 史 識

もする能はず、遂に二城を伊達に返して、和議を講じぬ。彼等諸豪が自家の利害よりして伊達、相馬の和議を悦こびたりと雖も、其の實は一步進みて伊達若くは相馬を自家の後援として、領土擴張の野心を包藏しつゝありし也。春秋に義戰なし、彼等豈に自家の利害を犠牲として天下泰平を悦こぶ者ならんや。田村の相馬に來りて切言したる所以のものは、彼れ大に期する處ありしが爲め也。彼れの女は政宗の室なりき、政宗は彼れの女婿なりき。彼れの室は相馬盛胤の妹なりき。其の女婿の爲め、其の義兄の子の爲めに平和を説くは、理なきにあらざれども、彼れの眞意は別に存せり。眞意とは何ぞや、彼れは相馬と伊達とを和睦せしめ、之れを後援として二本松義豪、並に四本松なる大内定繼を討滅せんとしたること是也。

感 史 識



和議成りて白河關外の矢叫びの音、暫らく絶わて漁樵の歌相和しぬ。而かも靜平の天地は霎時にして、伊達と大内の隣交は破壊せり。政宗は自ら兵を督して山道宮杜の城を襲撃せんとし、且つ使を相馬に遣はして、義胤に後援たらんことを以てせり。義胤は固是れ義に仗りて干戈を執るもの、大内の奸曲にして屢々隣交を破壊するを知るが故に、彼れは直ちに手兵を提げて三春に出陣しぬ。

兩雄相對したるは此時なりき。

語る處のものは何事ぞ、一は諸豪を一統して覇を白川關外に稱せん。と欲するの。大志を有するもの、他は義に仗り、生民の爲めに不義の抑壓を抗拒せん。と欲するもの、若し其れ終極の目的よりすれば、彼等は實に水と油の如きもの、和せんとして和する能はざる也。而かも其の結果は、兩雄相對して笑談介する處なきが如し。

感 史 讀

兩雄轡を駢べて襲撃す、義繼は到底事の成らざるを察し、詐つて軍門に降り、計を設けて輝宗を誘ひ、之を刺しぬ。而かも、義繼は遂に免る可からざるを知りて、自殺しぬ。

二本松城は此の悲しむべき報を受取りぬ。重臣忽ち策を決し、義繼の子國王丸を擁して國主となし、一門茲に籠城したり。

當時義胤三春の堂場に在り、政宗使を馳せて曰けらく、父輝宗敵の奸策に陥りて死を遂げぬ。子として豈に報復の戦をせざるを得ん、願くは姻戚の好を以て兵馬を假されんことを。義胤之に報じて曰く、陣頭相對して雌雄を決す、是れ武夫の常行、義繼何者ぞ、敢へて奸計を以て人を誘ひ、之を殺す、其の心卑しむ可し。今父の爲めに復讐を企圖す、是れ固より然るべき處、義胤驚鈍なりと雖も豈に一臂の勞を辭するものならんやと。彼れは直ちに二本松に向つて進發せり。

感 史 讀



## 説史感

今や東奥の兩雄、力を戮せ心を合せて二本松を攻せめんとす。時正に天正十三年十月十五日なりき。田村清顯は自家の宿望を達する曙光眼前に閃きたるが如く思惟し、彼は兩雄に繼て之に赴けり。政宗は先づ二本松城に肉薄せり。而も決死の將卒城に墜りて能く之を拒ぎ、牢として抜く可からず。政宗憤慨して曰く、掌大の地、彈丸黒子の城、之を陥る能はずんば天下を如何せん。時漸く寒く、日暮雪を飛ばして天地溟濛たり、士卒寒に堪へず、伊達勢は遂に圍を解かざる可からざるに至れり。斯くして滿天の風雪は山を埋め、路を埋め、三日止むなく、政宗をして戦を爲すの不利なるを悟らしめなき。二本松と伊達との戦争破裂は、單に二者の戦争のみにあらずして、

## 説史感

白川關外の諸豪をして一齊に起たしめたり。之れ疑ひもなく政宗に打撃を與へ、彼をして覇を關外に稱せしめざらんとしたるものにして、諸豪の意志の一致したるなりき。即ち佐竹義宣、蘆名彈正、白川義近、岩城常陸の諸豪は、孰も二本松の急を救はんとして兵を發し、相呼應して二本松城下に集まらんとせり。要するに諸豪の意は表面二本松を救ふにあれども、實は政宗を討滅せんとするに在りき。意外なりき。政宗には實に意外なりき。然れども彼は猶相馬の依るべく、田村の共にすべきを知りたるが故に、彼は此諸豪と決戦すべく策を定めぬ。政宗は先づ進んで陣を太田原に布き、田村清顯は阿久津に屯し、共に二本松の應援たる連合の軍を逆ひ撃たんとせり。政宗の陣營に向つて戦を挑みたるは佐竹なりき。歩騎一萬餘、滔々として洪水の岡陵に騰るが如く、其の勢ひ當る可からざるものあり



て、太田原は腹背敵を受けぬ。若し政宗をして尋常の將ならしめんには、直ちに陣を撤して退却すべきに、彼れは泰然として此の連合軍を冷視したり。而して彼れが率ゆる所の兵卒如何を願みれば、其兵僅かに四千五百のみ。此の寡兵を以て一萬餘の佐竹勢に當るすら、殆んど勝算覺束なきに、況んや此の以外に連合軍のありあるをや。彼れは如何にして戦はんと欲する乎。而かも彼れの胸中には成竹あり、眼前潮の如き大敵を見ながら、靜かなること林に似たり。天正十三年十月十七日、曉風林樾を撼かして、滿天の霜氣鐵衣鏘々たり。政宗は機先を制するの利なるを見、佐竹義宣の陣營に向つて進撃を試みたり。政宗の動くを見て義宣も亦た動けり。先鋒相觸れて中軍未だ戈を交へざるに、義宣は本國に於て不意の出來事ありとの報に接し、遂に政宗と雌雄を決するの不可なるを計りて、戰酣ならざる

讀

史

感

に早く己に退却の號令を全軍に傳へぬ。政宗の諸將は機に乗すべきを以て政宗に追撃を進策せり。而かも彼れは之を用ひずして曰く、敵事ありて退くと雖も、其兵我に幾倍するも知る可からず、寡を以て衆を追ふ、是れ危道に臨むもの也。戦はずして人の兵を屈する策の上乗なるものと。斯くして彼れは佐竹の退軍を悠然として望見せり。連合軍の主腦とも謂ふ可き佐竹は已に退軍したるを以つて、他の諸豪は危懼の念なき能はず。而して政宗の用兵は實に神出鬼没なるを知るが故に、何れも相戦ふの不利なるを覺知し、蘆名先づ退却し、續いて岩城も去りぬ。斯くの如くにして政宗は意外なる結果を收め、小濱に凱旋したり。若し他の諸豪が戮力以て伊達を攻撃するあらんには、好し佐竹無しと雖も、寡兵の政宗争でか支えることを得ん、恐らく此の戦に於て後年威を振ひたる獨眼龍を失ふに至りし

讀

史

感



なるべし。彼れは實に天佑を有せる也。翌十四年二月政宗は再び二本松城を攻畧せんとして進發せり。思ふに二本松にして永く城を保つあらんか、政宗の諸豪平定の大業は到底其の功を奏する能はざる也。二本松は實に中山道の中央部に位し、政宗にして若し白河關外を統一せんと欲せば、先づ之を攻畧し、而る後四方に其の勢威を發展せざる可からず、彼れ己に之を知るが故に、全力を用ひて之を陥れんとしたる也。然れども二本松は已に決死以て城を守れり、孤城落日に墜ると雖も容易に抜けざるものあり。政宗も亦た窮寇を追ふは己れに損あるの理を知るが故に、彼れは重圍持久の策を劃し、或は間牒を放つて内應せしむるの術を執りしと雖ども、君臣一致したる二本松城中には遂に此の術中に陥るものあらざりき。却つて其の策を着破して伊達に不利の事のみ多かりし也。

讀 史 感

讀 史 感

伊達の大軍に抗し、能く孤城を支えつゝある二本松の形勢如何を見れば、其の城を枕にし、君と共に存亡せんと欲するもの僅かに四十餘騎にして、他は婦女にあらずんば干戈に堪へざる老幼のみなりき。是に於てか守將は思へり、若し此の形勢にして曠日彌久せば、力盡き氣屈して異變の生ずるあらんも知る可からず。如かず彼れを夜襲し、以て一舉に雌雄を決し去らんには。事若し成らば佐竹、蘆名來りて我を援けんと、遂に此の策を執行するの議を定めぬ。守將尾張は纔かに三百餘の歩騎を率ゐて、大膽にも夜る政宗を八幡の陣に襲ひたり。此の策は奇功を奏し、政宗をして遂に退却せざる可らざるに至らしめたり。政宗は到底自己の力を以て攻畧し能はざるを看取し、使を義胤に遣はして、其の應援を請ひぬ。義胤は誼辭す可からざるものあるが故



に、手兵を提さげて二本松に向ひたり。義胤は先づ兩軍の形勢を觀察し、孤城の糧食に困せざるを怪しみ、供給者の存するあるを知り、人をして之を探らしむる處あり、果せるかな蘆名は山道よりして其の糧食を供給するの事實を得たるが故に、直ちに兵を遣して糧道を絶たしめたり。義胤は斯くの如く政宗を援けて二本松を困せしむると雖も、亦た一片の義侠心なきにあらず。彼れは使を城中に遣はして書を守將に送れり。其の書に曰く。

去年十月より今日に至るまで、伊達の猛勢城を圍むと雖も、勇奮拒守敵をして志を得せしめざるは、寄手の我等が偏に感ずる所也。然りと雖も孤城に嬰りて永く艱難の地にあらば、何の日か主君の家運を開かんや。終には一門亡滅して不祀の鬼たる可し、是れ豈に二本松の幸ひと謂ふ可けんや。願くは義胤の意見に任じ、速に

証 史 威

城を開き、會津に退きて後圖を爲す處あれよ、是れ却て策の得たるものなる可し。

と、城中此の書を得るや、將士の會議は開かれぬ。其の結局は義胤の意見をとすもの多く、遂に城を開きて會津に去るべきの議を決したり。斯くして天正十四年七月六日、二本松は城門を開きて相馬義胤を迎へ、一門は會津を指して落ちぬ。而して二本松城は伊達政宗の掌中に歸したり、是れ實に政宗が大に爲すの基礎なりき。

二本松の没落は獨り伊達の大となる基礎を築きたるのみならず、田村清顯をして聲威を加へしめたり。清顯の父顯隆は智勇兼備の良將なりき。故に須賀川の城主並に須田伯耆が岩瀬四十二郷を旗下とし、石川六十六郷を併せ、安積郡大槻の城主伊藤但馬が三十六郷を攻畧し、領土甚だ廣大也。清顯は此の領土に據りて益々聲威を振はんと

証 史 威



しつるに、天なるかな、彼れは天正十五年病没せり。彼れの病没は田村をして無主の家たらしめぬ。彼れは女子ありて男子なく、彼の後を繼ぐ可きものあらざりき。家臣は思へらく、今日の亂世に在つて一日も主なかる可からず、然れども其の主とすべきもの無きを如何せん。是に於てか、領土を舉げて保護を政宗に托すべしと云ふ者あり、之れに反して義胤は義人なり、之れに托するに如かずと論ずるものありて、議論二派に分れ、其の適従する處を知らず。然れども事焦眉の急也、宜しく伊達、相馬に交渉して其の意見を求むべしと議を決し、家臣の重なるものをして此交渉に赴かしめぬ。此の時に當つて政宗は其の室と琴瑟和諧せず、室は即ち清顯の孫女なりき。此の事情よりして清顯の室は領地を舉げて伊達に托するを忌みにき。事情は又もや政宗と義胤とをして、不和を生せしむるに至れり。

証 史 感

至れり。

義胤は清顯が後室の希望によりて三春城に入らんとしぬ。然るに城中は其の前日に於て悉く伊達に興みし、義胤の入城するに際して、不意に之を襲撃せり。義胤安ぞ驚かざるを得んや。彼れは實に伊達が術中に陥りたるを知れり、憤慨措く能はずと雖も、寡兵の以て如何ともする能はず、彼れは再舉を期して城を出でぬ。從者謂て曰く、事茲に至りしは歎を政宗に通ずる者の致す處也、寧ろ彼等の妻子を捕へ來りて質となすに如かずと。義胤制して曰く、假令進退谷まり、屍を草野に横ふると雖も、婦女幼童を對手として戦はんこと、是れ豈に武門の耻辱にあらずや、再び罪を正うするの期あらんと。悠然として退却したり。

義胤は相馬に歸らんとせり。何ぞ知らん沿道の諸豪は義胤の危難を

証 史 感



百四十四  
聞いて、却つて道に要するあらんとは。義胤は實に囊中の鼠となれり。然れども天成の智勇は遂に戦闘に談論に諸豪を屈し、萬死の中に一生を得て、彼れの領土に歸れり。歸りて彼れは何を爲んとするか、彼れは懇親なりし政宗の不義を知れり、田村の已に伊達に傾きたるを知れり。四面皆な敵なるを知れり。彼れは如何にして此の恨を報い、此の不義を正さんとしつるぞ。

義胤は己に田村の後なくして、權臣互に相争ひ、終には一領を擧げて伊達に托せんとするに至りしを見て、若し田村にして伊達に托するならんには是れ家系を存するにあらずして、一門を驅つて滅亡の悲運に會せしむるものなりと思へり、義胤豈に之を傍觀し得んや。而して不意の襲撃は彼れをして忘る可からざるの恨を骨髓に印せしめたり。彼れは相馬に歸來の後、暫く銳を養ひ、機の至るを待望し

つゝありき。

機は至りぬ。時は天正十七年五月十七日、岩城常隆の助言によりて、義胤は手兵を率ゐて田村領なる三春の大越の城に入り、直ちに三春城に肉薄したり。城兵殊死して拒戦し、義胤志を得る能はず。彼れは遂に長圍の策を決し、以て敵を窮せしめんとせり。然るに何ぞ計らん急報は至れり。曰く伊達政宗銳を悉して駒ヶ峰城に迫れりと。駒ヶ峰は是れ相馬領北方の屏障、義胤豈に驚かざるを得んや。彼れは遂に眼前の小敵を捨て、背後の大寇を掃蕩せんが爲めに、夜圍を撤して去りぬ。是より先き政宗は岩瀬郡の須賀川と攻畧せんとして進發したり。然るに相馬義胤罪を田村に問はんとして山道に赴むきたるを聞き、機乗すべしとなし、中途より馬首を回し、虚を窺ふて新地駒ヶ峰の兩城を攻畧せんとし、五月十七日暗夜に乗じて肉薄した



り。當時中村城の守兵多からず此の急報に接して如何ともする能はず、直ちに使を義胤に遣はして大事至るを報しぬ。駒ヶ峰の守將能く戦ふと雖も衆寡の勢ひ遂に保つ能はずして、城は政宗の爲めに攻畧されぬ。新地駒ヶ峰の二城は、相馬北方の重鎮として要害なりき。然るに今や悉く政宗の手中に歸せり、義胤豈に晏然たるを得んや。

## (五)

相馬の北關たる駒ヶ峰の城は陥りぬ、是豈に相馬の晏然たるべき秋ならんや。亘理元安齋は相馬の北關既に破れたるを見て、彼れは其の素望を遂げんと欲し、屢々機を覗ふて相馬を劫かせり。義胤は惟

らく駒ヶ峰陥り、亘理我を窺ふあらば、彼れ政宗必ず隙に乗ずるあらん、若かず速に亘理を討滅し、以て後の患を絶んにはと、直に弟隆胤に命じ、亘理を襲撃せしめぬ。隆胤は此の命を受くるや、手兵を提げて海濱より北向し、亘理の不意を撃たんと擬せり。元安齋父子は此の報を得て兵を出し、先づ隆胤の軍を阻止せんとせり。義胤は精兵を率ゐて中軍となり、正々として坂本城に逼れり。亘理元安齋は到底義胤の敵にあらず、而かも彼れは義胤に對して相戦んとするは、政宗が後援を恃みしが爲め也。斯くして兩軍相戦ふこと激しく、互に勝敗あり、義胤また志を得ず。隆胤も亦た勇猛にして能く兵を用うると雖も、地理宜しからず、徒に亘理勢の爲めに其の前途を遮斷され、義胤の軍に合する能はず、曠日彌久、遂に退却するの已むなきに至れり。而して敵兵愈々振ひ、動もすれば尾し



て直ちに中村城を衝かんとするの勢を示せるを以て、義胤は遂に時機の不可なるを考へ、軍を收めて退きぬ。是れより亘理勢の相馬の北境を窺ふこと日に益々多く、拂へども來り、撃てども退かず、相馬は遂に枕を高くする能はざるに至れり。

天正十八年五月には、亘理勢不意に中村に向つて攻撃し來り、先づ蛇山の嶮を占領せんとせり。此の報の相馬に傳はるや、隆胤大に怒り、手兵を提げて蛇山に向ひ、馬を丘上に立て、敵軍を望めば、劍戟相觸れ、鐵蹄塵を蹴り、宛然潮水の岸頭を嚙まんとするに似たり、此の攻撃軍は單に亘理勢のみならず、政宗の援兵も亦た加はり、一舉して中村城を攻陥せんと擬しつゝある也。隆胤は勇猛にして能く兵を用ゆると雖も、元是れ性急短慮の質、彼れ豈に此の大敵に向つて逡巡せんや。彼れは衆寡の敵す可からざるを知らざるにあらず、而

かも彼れは此の如き時に臨んでは、進むを知つて退くを知らざる也。勝敗の數は未だ戦はざるに先だちて明けし。隆胤の手兵は僅に十數騎に過ぎず、而して敵は千餘の歩騎にして、兵器之れに副へり。果せるかな、其の鋒を交へ、未だ戦半ならざるに、隆胤は退却せざる可からざるの逆境に陥りぬ、彼れは其の退却するに當り、馬逸して深泥に陥り、また如何ともする能はざるに至り、自刎して死しぬ。隆胤の死は相馬軍の最も苦痛なる打撃なりき。義胤弟の死を聞き、奮然として起ち、夜を冒して小高城を進發し、亘理勢を防がんが爲めに中村城に入れり。時や已に敵は中村城を距る目睫の間に逼り來れる也。

彼れは雷轟電撃の勢を以て亘理勢を撃破し、逃ぐるを追ふて駒ヶ峰城に迫り、急に之を攻陥せんと策せり。然れども彼れは後顧の憂あ



るを慮かり、中村城に退却して銳を養はんとしぬ。斯くして新地駒ヶ峯の城は永久伊達の手に残れり。

此の如く亘理は、相馬に向つて攻撃を加へつゝある間に於て、伊達政宗は自家の所領を擴張せんことに努め、一方に於ては亘理に援兵を送り、他方に在つては曾つて志を得ざりし二本松に對して隙を窺ひ、虎視眈々として諸豪を併呑せんとしぬ。彼れは一見獍猛の將に似たりと雖も、其の士卒を撫するや仁慈、其の己れを持するや謙讓能く士卒の志を得たり、彼れは戰國時代に於ける武邊一儀の將にあらず、書を讀んで聖賢の道を學び、筆を執つて文字麗はしく、所謂才文武を兼ねるの良將なりき。之を輔くるに智謀當時に超越したる伊達成實、戰事に熟練なる片倉景綱の二將を以てす、故に彼れは久しからずして幾度か失敗したる二本松を陥れ、三春を併せ、勢威日に

に振ふに至れり。

是より先き豪族蘆名盛重政を失ひ、人心離反して所領大に亂れぬ。政宗之を聞いて臣下に謂て曰く、今や白河關外を一統すべきの時機は來れり、予の最も慮りたるものは蘆名と相馬とのみ。然るに相馬は亘理を以て其の進畧を防壓せり。而して蘆名の政を失ひ、人心日に離るゝこと此の如し、是れ正に彼れを討滅すべき時也。然りと雖も干戈を交へて士卒を損せんよりは、先づ戰はずして屈せしむるに如かずと。彼れは臣下に命じて反間を放たしめぬ。時に蘆名に老臣四人あり平田、松本、佐世、多岡と云ふ。政宗は平田周防、多岡美作の二家老を説いて曰く、盛重已に政を失ひ、所領を保ち難し、坐から亡滅を招かんよりは、來つて我が爲めに高材を揮はるならんには、我も亦た酬ゆる所なくんばあらずと。二人は此の甘言に欺かれ



威 史 説

て遂に款を伊達に通ずるに至り、松本は已に病死し、残るものは唯佐世平八郎の一人のみ。政宗は其の反間の功を奏したるを見て、彼れは公然蘆名盛重に對して宣戰状を送りぬ。書中言へるあり。政宗義によりて無道の蘆名を討し、人民の困苦を救ふと。蘆名は豪族なり、假令衰運眼前に迫ると雖も、此の無狀に對して激せざるを得んや。盛重士卒を率ひて、政宗を摺上原に逆撃す、二家臣の款を政宗に通ずるありて戦利あらず、退いて城に嬰り敵を防ぐと雖も、將士離散遂に支ゆべからざるを知り、盛重間行して常州水戸に走り、名を義廣と改め、城遂に陥りて蘆名の宗祀茲に斷絶したり。政宗は已に會津を滅ばし、直ちに居城として所在の豪族を討たんとし、威名日に盛なり。先づ須賀川を攻めんとして其の隙を窺ふ。此時に當り城主二階堂盛行己に逝いて繼嗣猶ほ幼也。家臣相議して援

威 史 説

を岩城、佐竹に請ふ。使者未だ兩豪族に至るに及ばざるに政宗急に攻撃し來り、孤城一夜にして陥落しぬ。斯くして石川照光降り、白川義直降り、岩城も亦た存亡旦夕に逼り、漸くにして伊達の名臣片倉小十郎により、所領を保することを得たり。斯くの如くにして白川關外の豪族は皆な政宗の爲めに討滅せられ、所領を併吞せられ、また相對して衡を争ふものなきに至れり。獨り相馬は海道に據り、靈山の山脈を以て伊達と其の所領を限り、自然の形勢は獨眼龍をして其の野心を遂行する能はざらしめぬ。然れども群羊を驅りて其の吞噬を逞うしたる猛虎、争でか此の儘にして止むべけんや。彼れは相馬を攻畧せんとして日夜其の方策を劃したり。先づ亘理元安齋を援けて北方より進撃せしめ、己れは精銳を以て西方より相馬に入らん



し、彼れは慣用手段なる反間を放ちて先づ草野の城代岡田兵庫と、千倉の庄なる寺内刑部の二人を説くに利を以てし、内外相應して一舉に相馬を討滅し去らんと試みぬ。相馬の亡滅は早や眼前に逼迫し來れり。

## (六)

義胤形勢の日に切迫し來るを見るや、父の盛胤と共に日夜伊達に對するの策を劃し、如何にもして祖宗の國土を保有し、相馬の宗祀を長うせんとしたりき。時に政宗の扈從たりし保原伊達の子某（名を逸す）相馬の家臣に書を寄せて曰く、政宗大軍を起して近く相馬を討つに決せり。其の一般方畧は岩城の援兵を得て相馬國境の各處よ

り、同時に襲撃するに在り、諸君固より忠勇の士、粉骨碎身以て之を防がば、一旦は必ず勝利を得ん、而かも終始持續すること恐らくは難からん、是れ相馬の大事にあらずや、宜しく此事を以て盛胤君に告げられよ、政宗にも本と相馬とは姻戚の縁あり、事を明かにして相争ふの不利を申告されなば、決して違亂せざる可し。此の者曾つて扈從たりし日、故あつて國を去り、暫く相馬に來りしが、盛胤其の情を憐れみ救助する處ありき。後伊達に歸りしが、盛胤が厚情に感じ、此の急を告ぐるに至りしものなりき。家臣は此の書を以て盛胤に示せり、盛胤直ちに復書すべきを命じ、義胤を小高の城に見て、告ぐるに此の事を以てし、老臣を召して其の策を問ひぬ。老臣は答へぬ、今政宗の大軍に當り、内逆賊多くして外救援なし、到底勝を期する能はず、形勢已に此の如し、若し強



めて之と戦はゞ祖宗の國土一朝にして亡滅せん、如かず辭を設けて  
 期を永うし、以て時機の至るを待たんには、此例古今に多し、近く  
 は隣國の諸豪、昨は政宗と比肩して相争ひ、而して今や其の旗下と  
 なりしもの少からず、豈に特に相馬のみならんや。而して今日に至る  
 まで政宗と相戦ふて、未だ敗を招きしことあらず、故に政宗に恐怖  
 して其の隨ひたるものと思ふものあらざる可し、是れ只時の不可な  
 るに處するの策のみ、安ぞ武門の耻辱ならんやと。諸臣皆以て然り  
 と爲す。獨り義胤毅然として曰く、相馬は小身なりと雖ども、伊達  
 と干戈を交ゆること茲に五十餘年、晴宗より政宗に至り三代、未だ  
 曾つて敗を招きしことあらざる也。是れ偏に衆の身を捨て、以て義  
 に殉ひたるの功のみ。顯胤の時よりして、鋒鏑に膏したるもの決し  
 て尠からず、彼等は實に相馬たるの名を汚さんことを恐れたる也。

感 史 讀

然るに今や宗祀を断たんと恐れて伊達の旗下たらんとす、是れ實に  
 丈夫の耻づべきことにして、何の顔ありて地下の祖宗と臣下とに見  
 えんや、義胤にして生を保する間は、伊達と相戦ふて勝敗を決し、  
 以て相馬の武運を決すべきのみ、天若し相馬に幸せずんば、是れ運  
 命の断する時のみ、洵に己むを得ざる可しと。君己に此の決意あ  
 り、臣豈に躊躇せんや、彼等は血を啜つて政宗と成敗を決せんこと  
 を盟ひぬ。

感 史 讀

義胤は直ちに臣下を召集して時勢の切迫したるを告げ、且つ曰く、  
 此の時に臨んで伊達に仕へんとの志望を有するものは、汝の意の儘  
 のみと。而して一人の伊達に志するものあらざりき。  
 義胤莞爾として曰く、衆力の一致此の如し、豈に一の政宗を恐れん  
 やと、直ちに歩騎を整備し、各隊向ふ處を部署し、政宗にして國境



に臨むあらんには、一撃の下粉碎し去らんと意氣昂然たるものありき。事遂に政宗の聞く處となれり。彼れ嘆じて曰く、衆心の一致斯くの如し、好し終には討滅し去るも、兵を失するの多きを如何せん、如かず手を戢めて時機の至るを待たんにはど。斯くして相馬は政宗の手を免れて、永く漁樵の謳歌を聞く治世に残れり。此の時中原を望めば、羽柴秀吉、逆臣光秀を討滅して四海を掃蕩せんとの志あり、天正十八年には諸國に令して私戰を禁せしめぬ。而して北條氏政の従はざるを以て、彼れは北條氏を討滅せんとし、十萬餘騎を勒して小田原を圍みぬ。義胤之を聞くや、直ちに國を出で、秀吉に小田原に見えんとせり。而かも道路遠隔にして日を曠うし、小田原に著したる時は、北條己に亡滅したるの時なりき。此時東北の諸豪にして謁見の期に後れて、領土を没し若しくは移封されたるもの多かりき。

是れを以て白河關外が一旦伊達政宗の統一する處となりしと雖も、秀吉の天下を掌握するに至りて、一變轉を來しぬ。即ち秀吉は伊達の故なくして蘆名を討滅したるを怒りて之を没し、白川義近も亦た領土を沒收されて、身は蒲生氏郷に預けられ、岩城は其子貞隆の在りて政宗の旗下を離れて獨立せり。其後東山道氣仙の亂あり、蒲生氏郷平定の功によりて本領を會津に與へられ、南の方、白川、伊達、信夫、北の方蒔田、白石と米澤の一半とを併有するに至り、政宗は遂に猛威を振ふ能はざるの情形となれり。斯くて秀吉天下を一統し、遙に兵を出して朝鮮を討たんとし、本營を名古屋に移しぬ。義胤出軍の命を受けて發程し、名古屋に至りて韓嶮に參し、征伐の籌謀を策せり。振古の大業未だ遂ぐる能はざるに、豊公は空しく歿し、遣外の將士



恨を呑んで歸るに及び、世運は變轉して遂に關ヶ原對戰の序幕を開  
始したり。

曩に小田原征伐の際、謁見遲參の罪によりて、義胤も亦た領土を沒  
收されんとせり。幸ひに石田三成と素あるが爲めに、事無くして過  
ぎしと雖も、關ヶ原の戰には石田三成西軍の將たりしを以て、義胤  
前恩を無視する能はず、隣國が二派に分れて争闘しつゝある間に、  
義胤は嚴として局外中立を守り、自家所領を護するのみにして、東  
西何れに對しても一兵をも動かさざりき。此の故に戦止みて大勢の  
家康に歸するに及んで、忽ち所領沒收の飛札は天外より來れり、家  
臣色を失し相見て語なし。義胤意決するものゝ如く、臣下を慰撫し  
て曰く、事茲に至る天の命のみ、また何をか恨みんや、士、道を踏  
んで而して倒る、地下の祖宗に耻るなしと。時に佐竹義宣より使者

感 史 説

來る、曰く義胤公には替地の命なきは、是れ實に意外の事也、依て  
余が所領の内一萬石を割きて公を迎ふべしと。臣下は皆な喜べり。  
獨り子の利胤從容として父に謂て曰く、己れ其の領土の小なるを厭  
ふにあらず、若し此の事にして徳川の意に出づるならんには、己れ  
之を受くるに躊躇せざるべし。然れども是れ佐竹の厚意に出づるを  
如何せん、天下の諸侯としては猶ほ尺土に據るべし、佐竹の旗下と  
して生を聊せんよりは、寧ろ天下の浪士たらんのみと。義胤之を然  
りとし。佐竹の厚意を謝して之を辭し、義胤は家臣數名と共に三春  
に寄寓するに至れり。元享中重胤總州相馬より封を移してより以來  
歳已に久し。今や此の住み馴れたる故郷を捨て、流浪の身となる、  
義胤の心情果して如何。  
然れども天は此の老雄をして悲惨の末路を遂げしむることを欲せず、



子。の。利。胤。京。に。在。り。て。陳。辯。最。も。努。め。且。つ。家。康。の。義。胤。が。智。勇。兼。備。の。老。雄。た。る。を。聞。き。幾。く。も。な。く。し。て。本。領。安。堵。の。命。を。下。せ。り。

寛。永。十。二。年。は。實。に。此。の。老。雄。が。天。に。歸。る。べ。き。使。命。を。受。け。た。る。年。な。り。き。

彼。れ。は。秋。よ。り。病。魔。の。襲。ふ。處。と。な。り。冬。に。入。り。て。よ。り。て。は。病。大。に。革。ま。れ。り。其。の。限。せ。ん。と。す。る。前。家。臣。を。召。集。し。て。病。を。強。め。起。坐。し。て。曰。く。卿。等。が。父。祖。と。其。の。子。に。至。る。ま。で。我。家。の。爲。め。に。忠。誠。を。盡。せ。る。こ。と。我。れ。豈。に。死。す。る。も。忘。れ。ん。や。唯。卿。等。に。言。は。ん。と。す。る。處。は。大。膳。亮。の。事。な。り。我。は。此。の。幼。弱。の。主。を。以。て。卿。等。に。附。す。願。く。ば。其。の。幼。弱。を。憐。れ。み。相。馬。の。爲。め。に。盡。す。處。あ。る。可。し。わ。が。命。既。に。旦。夕。に。在。り。子。に。對。す。る。の。訓。諭。三。ヶ。條。を。遣。せ。り。卿。等。も。亦。た。能。く。我。が。志。を。察。し。て。幼。弱。を。扶。翼。さ。れ。よ。と。老。臣。を。し。て。遺。言。狀。を。朗。讀。せ。し。む。

三ヶ條

讀 史 感

- 一 幾。度。登。城。す。る。と。も。初。て。の。御。禮。の。様。に。可。愼。事。
- 一 弓。馬。は。士。の。嗜。む。處。讀。書。は。諸。用。の。本。四。ツ。の。物。一。つ。も。闕。て。は。末。の。可。爲。不。足。
- 一 内。の。者。を。耻。よ。

右三ヶ條は常に可心得須臾も不可忘失也

大膳亮近習の扈從亦時有諸士身近く仕る時可心得事

- 一 形儀等不可亂萬稽古の時別の雜談無用也勤學の時は下々も好々の書讀等を披見せば末の用に立つ可し
- 一 奉公の儀可懸心主人の爲め身の爲めなるべし生を受くる者苦の無き事はある間敷也
- 一 主人と雜談の時其の意に乗て卑き詞を出す可からず世間の話等分別致可及挨拶事



右上下各々常々可<sub>レ</sub>覺悟也  
彼<sub>レ</sub>は此の訓誡を遺し、寛永十二年十一月十六日八十六の壽を以て  
逝<sub>キ</sub>ぬ。其の碑に誌して曰く、蒼<sub>ノ</sub>香院殿外天頭雲大居士。

風波のはじめや

奥の田植歌

(ばせを)

### 間宮林藏

……………(邊疆探檢者の一生)……………

(一)

間宮林藏は安永九年を以て常陸の國筑波郡に生る。家道至つて豊な  
らず、僅に朝夕の煙を立て得るに過ぎざりしも、他に兄弟とてもあ  
らざりしが爲に、父母は深く彼に慈愛を加へぬ。彼れの算數に於け  
るは天才にして、兒たりし時已に幕府の檢地吏を驚かし、其の初め  
て師に謁して、算數を授けられたる際、師は先づ二一天作の五を教  
へけるに、彼れ師に反問して曰く、是れ百を二に分ちて五十になる  
の謂かど、師は然りと云ひけるに、彼は然らば算法は悟了せり、學  
ぶに及ばずとて辭し去りぬ。時に彼の年齒僅に九歳。十八歳の時普



請雇となり、二十歳に普請役下役として幕府に仕へぬ。是よりして彼れは其の天才を發揮すべき首途に上れり。

今を距ること百六十餘年前、櫻町帝の御宇、徳川吉宗將軍たりし時、黒船の帆影が牡鹿海上に現れてより、北海の波濤穩ならず、續いて露人の我が千島に入寇するあり、幕府は北邊の警備を忽になす能はざるを知り、蝦夷地經營の議大に起り、天下の人才を舉げて北邊に赴かしのめぬ。當時林藏も選抜の一人として、井上傳十郎と共に宗谷に在り。命を受けて文化五年四月十三日、井上と共に蝦夷人を引連れ、宗谷を發して樺太に渡航しぬ。一行の樺太に著するや、相別れて兩海岸を探検せんことを約し、井上は西海岸に向ひ、間宮は東海岸に出でぬ。彼は井上に別れてより直に海岸を奥地に進み、知床岬に達したれども、是より前途は、潮汐急にして夷船の以て航通し能

はざるが故に、已むなくもマアヌイより山野谿谷を横斷して、ナヨコに至り、此處にて井上の歸來を待ち、兩人相會して探検の模様を物語りぬ。彼は井上に謂つて曰く、東海岸知床までは、充分地理状態を知り得たるも、君が探検し得たる地に至らずんば、職を盡したりと言ふを得ずとて、強いて井上の同行を求め、ラツカ岬までを探検して歸り來りぬ。斯くして我が國人の足未だ到らざる樺太島を探検し、二ヶ月を瘴煙蠻雨の間に送りて、無事宗谷に歸著し、奉行河尻肥後守に國境見分の詳細を復命に及びたり。然れども間宮は東海岸知床岬より以北を探検し得ざりしかば、奉行は彼れに命ずるに再探検を以てし、彼れは再び夷舟に棹して、北蝦夷の國境を探検し滿州領に入るととなりぬ。

彼れは文化五年七月十三日を以て宗谷を發し、樺太のシラヌシに著



し、船を待つこと三日、僅に夷船を得、五日を費やしてトンナイに  
 著し、此處にて土人を雇はんとしたるも、皆な深く不毛の地に入る  
 を恐れ、従はんと云ふものなく、非常なる苦心を爲したる後、漸く  
 にして舟子六人を雇ひ、八月三日を以て出帆し、日數十三日を費や  
 して、リヨナイに至りて一泊しぬ。時に山旦夷數十人、船六隻に乗じ  
 て來り、彼れの従夷を劫かしぬ。彼れは當時の狀を記して曰く、  
 種々なる妄言誕語を吐き、奥地に至り難しなぞ罵り、且つ其の齋  
 す處の糧酒諸雜具を奪はんとしける故、従夷は大に驚きたれども、  
 言語不通なれば施すに術なく、従夷を諭して米酒若干を與へたる  
 に、漸く暴を留めたりければ、其の處より船を出して南方に進み  
 去りぬ。其の始末を察して、是より南方に歸り去らんと云ひ出し、  
 更に奥地に進むと言ふもの無かりしかば、苦心する處只ならずと

雖も、従夷の言ふ處眼前に見る處なれば、其の恐怖する處理なき  
 にあらず、さればさて、是れより歸り去る時は、何時にか奥地に  
 至り得べきと、夫より酒など與へて慰めければ、従行すべしと云  
 ふに至り、大に力を得て、茲に日和を伺ふの間、日數十一日に漸  
 く風波も穏なれば、同月廿五日此處を出で、九月三日トシヨコウ  
 に至りぬ。  
 と彼は是よりして異俗の夷域に入りぬ。

## (一)

彼れの旅程は、日より日に北海に近づきつゝあるを以て、寒威漸く  
 加はり、深秋九月已に飛雪を見るのみならず、齋す處の糧食も亦た  
 稍々少きを感ずるに至り、従夷皆な歸らんことを思へり。彼れは已



むなくも、船をリヨナイに回し、海上の氷結を待ちて再び探險を繼  
 續せんとし、五寒積雪の間に、歳茲に暮れ、明くれば文化六年正月  
 廿九日再び程を起して二月二日にワシヨロに至り、四月九日を以て  
 テトノ岬ニ達し、夫より北進するに従ひ、地勢韃韃と相隣り、遙に  
 北海に臨みて波濤漸く急激に、到底夷舟を行るに便ならず。彼れは  
 憂鬱の間に時日を此の地に費やし、東海岸に達すべき手段を講じた  
 るも遂に果す能はず、土人に就いて東海岸の地理を問ひ、又た東韃  
 露國の境界等を調査せんとしたりしも、固より離島の事とて、境界  
 あるべきなく、夷の知らざるは當然なりき。彼れは思へり、東韃に  
 入りて其の事實を確めなば、また便宜あらんと。斯くして彼れは露  
 領東韃に入らんと決心し、書を作りて探險したる樺太島に關する事  
 情は、詳細に記述し、之れを従夷に附し、且つ我にして萬一死亡す

証 史 感

る。あ。ら。ば、汝。等。は。之。れ。を。持。し。て。シ。ラ。ヌ。シ。の。役。所。に。捧。ぐ。べ。し。と。命。じ、  
 文化六年六月廿六日、土人男女七名を従へて夷舟に乗じ、東韃行の  
 程に上りぬ。彼れは此の行に於て、如何に辛苦を嘗めしぞ、其の紀  
 行中に左の一節あり。

キチーと云ふ處に至りしに、住夷大に之を怪み、凡て二三十人群  
 集し、大いに罵ると雖も言語通せず、地夷の家に至りしに、夷は  
 他行して其の家婦のみ家を守る。先づ此の家に入りしに、群集の  
 諸夷従ひ來りて、家の内外に立ち集ひ、妄に林藏を捕へて外に伴  
 はんとするが如く、手を引き足を引き、辭すると雖も更に肯かは  
 ず、遂に衆夷に拘へられ、隣家に行きしに、時既に薄暮なり、妄  
 に家内の暗き處に伴ひ入れ、毛氈の如き物の上に蹲居せしめ、多  
 く來りて林藏を抱き、頬をすり唇をなめ、衣を挽いて、物あれば

証 史 感



懷を探ぐるものあり、手足を弄びて髪を握り、頭を撲つて笑弄する。事暫時にして、後酒肴を出し、強ること又た切なり。其の意蓋し齋す處のものを取りらんと欲するの心なるべし。此の如くして、凡そ一時計りを経る間、始終夢中の思ひあり。船夷ライノ來りて、大に怒り、嚴に諸夷を叱り、林藏を伴ひ出し、河濱に出づ、諸夷ニシバを殺さんと云ひしと云ふて、チオーカ家に伴ひ歸り、其の夜は其の家の倉中に寓す。

如何に其の光景の鬼ヶ島の昔噺に似たるよ。彼れは此の如き出來事には屢々際會しつゝ、七月十七日を以て滿洲假政府の所在地なるレンに著しぬ。彼れの假政府に滞留する間も、衆夷來りて罵詈訕弄する日としてあらざるはなし。而かも彼れの志や他に存す、異族の嘲弄は彼れに於ては方さに蚊群の聲のみ。滞留すること七日にして、

遍ねく事情を調査し、此處を辭して歸途に就き、或は夷家に宿し、或は山野に暴露し、漸くにして九月十九日、樺太のシラヌシに至り廿八日を以て宗谷に歸著しぬ。彼れが此の行によりて前人未發の北蝦夷地方の地形を實視踏査したるのみならず、遠く現今の西伯利に入りて未開の蠻地を踏査し、之が事情を我幕府に致して、北邊警備に資したるの功に至りては、決して没する能はざるなり。

彼れは斯くの如く征行の苦を嘗めて、北蝦夷及び東韃靼の地勢を視察測定し、新に北蝦夷圖を製し、圖説及び概論を公にせり。勿論彼れは文章に堪能ならざりしが爲めに、紀行及び是等の文章は總て通辭村上貞吉に口授して、之を筆記せしめたるものなりと云へり。而し



## 説史感

て彼れが此の探検によりて、樺太島が一個の島嶼なることを確定したり。蓋し之れより以前に在つては、樺太島は東韃靼と地を接し居るや否は、世界の地理學者及び航海者の疑問としたる處にして、當時泰西人の手に成りし地圖は、何れも之れに就て明瞭なる記録はあらざりき。彼れの一次び足跡を北蝦夷に印して、韃靼海峡を横ぎるや、遂に實際に於て其の接地にあらざるを證明したり。然るに嘉永元年（一八四九年）に至り、露國の探險者ネウエリスキー氏は、此の海峡を探検し、樺太を以て露國の屬地となせり。彼れは初めて發見したるが爲めに露領と爲したるものとせば、間宮林藏は彼れに先だつ四十年前に於て己に是れを探検したり、チウエルスキー氏をして發見の名譽を檀にせしむる能はず。此の點よりすれば、樺太全島は已に文化年間よりして我が屬島たるものにして、後年に及

## 説

## 史

## 感

んで境界論の起るが如きことは決して無き筈なりしに、明治八年の條約は、彼れ林藏が苦心測量したる江山を擧げて、久留里諸島と交換し終り、名工の經營したる製圖は、空しく官府の書庫中、薄書と共に蠶魚の餌に供せしむるに至りぬ。彼れは樺太の踏検と測量とによりて、其の名世に聞えられども、彼れの測量に従事したるは、單に此の一地方のみにあらず、千島列島の如きも、彼れは詳細に之れを測定せり。尤も千島測量に従事したる時は、露寇の擄捉其他に來りし時にして、兵馬倥傯、邊警日に急なりしかば、彼れの戎軒に従ふの日多くして、思ひを學術に専らにする能はざりしと雖も、而かも彼れは此の間に在りて爲し得る丈の測量を爲しぬ。左れば當時に在つては、蝦夷圖として世界彼れの右に出づるものなかりき。其の彼れが北海の壯遊を終へて江戸に歸る



や、蘭國醫官シーボルト彼れの手に成れる製圖を得んとして、百方説く處ありしも、彼れは頑として應せざりき。後幕府天文方に高橋作左衛門と云へるものあり、シーボルトが所持せる和蘭屬島圖と交換せんことを企てしかば、林藏之れを看破し、幕府に密訴して、高橋を死刑に處し、地圖は幸に外人の手に入らずして止みぬ。

彼れの晩年は誠に索莫の感に堪へざるものなりき。志を北海に伸ぶる能はず、江戸に來りてよりは幕府の探偵として、西海の某藩の事情を探り、石州濱田の回船問屋が、密貿易の證跡を擧げたるに過ぎず。後大久保忠眞の知る處となりて、聊か驥足を伸ぶるの端緒を得たるも、不幸天は彼れをして老來失意の境遇に居らしめんとにや、忠眞は病によりて卒去しぬ。是れより世に彼れが才器を知るものなり。

彼れの志を北邊に馳するや、近藤重藏、平山行藏と名を伴うし、世呼んで三藏と云ひぬ。單に製圖家を以て終らんとするものにあらずりき。形勢を案じ、邊備を修め、以て定遠封侯の勳を策せんとしたるや明か也。而して時勢は遂に其の志を伸ぶる能はざらしめぬ。老來川路聖謨に太刀装具を贈りて曰く、蠻人將に害を我國に爲さんとする。こと必せり、然れども我は老いたり、之を見るに及はず、足下尙ほ壯年なれば、此の變に遭はん、其の時之れを帶し玉へ、是を我の遺物として看玉へと、以て其の志の存する處を知るべき也。彼れは弘化元年二月二十六日江戸深川の橋居に沒せり。今や我が邦彼れが先見したる如く露國と事あり、此の際聖恩の優渥位階を追贈され、春風古骨を吹いて、櫻花墓畔を埋む。彼れの靈にして知るあらば、必ずや天恩の優渥に感泣せん。



ここさらに境は立てじ日の本は

山櫻木のあるにまかせて

(讀人しらす)

### 幕末の一奇僧

(上)

………靜慮庵慈隆師………

余去ぬる日故郷に歸りし折、愛宕山に遊びぬ。此山は中村市街の西半里ばかりの處に在りて満山總て是れ老松、天風浩々として梢頭を度り、地幽にして氣爽かに、遠く俗塵を避く。余の幼時は屢々茲に

遊び、時に歸るを忘るゝ事ありき。而して余の斯く歸るを忘るゝ程に此地を愛したるものは、只山の幽にして地の清きが爲めのみならず、實に一種忘る可からざるの紀念物あるが爲め也。思ふに此心存するものは余一人のみならずして、苟くも相馬に生れ、相馬に人と成りたる者は、必ずや此一念を存するなるべし。紀念物とは何ぞや、一は靜慮庵の墓碑にして、他は誠明先生の墓碑也。

誠明先生とは是れ二宮尊徳翁の事にして、翁が相馬藩の大恩人たるは言ふまでもなし、而して其事書冊に傳ふ、故に余は靜慮庵其人に就て少しく語る處あるべし。

靜慮庵は相馬一番の師傅たるのみならず、天下の名僧なりき。相馬藩に於ける人物のみにあらずして、東奥の偉人物なりき。若し僧の月照を以て幕末勤王攘夷の精神を抱懐したる奇僧と爲すならば、靜



感 史 識

慮。庵。は。實。に。其。れ。以。上。の。勤。王。攘。夷。の。精。神。を。抱。懷。し。た。る。奇。僧。な。り。し。也。斯。く。の。如。き。奇。僧。は。何。が。故。に。東。奥。の。一。小。藩。に。客。寓。し、其。名。天。下。に。著。は。れ。ず。し。て。空。し。く。遷。化。し。去。り。し。か、余。は。此。地。に。遊。び、此。碑。に。對。す。る。毎。に。轉。た。此。感。を。深。う。し、其。不。幸。を。吊。す。る。の。念。に。堪。へ。ざ。る。也。

彼。れ。の。父。は。龜。掛。川。東。作。と。云。ひ、後。に。鶴。翁。と。改。め、仙。臺。の。産。な。り。し。が、後。故。あ。り。て。下。野。國。日。光。に。移。住。し、醫。を。以。て。業。と。し。ぬ。慈。隆。は。文。化。十。二。年。を。以。て。生。れ。ぬ。彼。れ。は。幼。に。し。て。強。悍。不。羈、隣。兒。の。屢。々。惡。戯。を。以。て。苦。し。む。る。を。憤。り、刀。を。以。て。之。を。刺。し、遂。に。死。に。致。す。彼。れ。は。睡。眈。の。怨。を。も。必。ず。報。じ、一。飯。の。恩。も。必。ず。酬。ゆる。の。氣。慨。を。有。し。ぬ。父。は。彼。れ。の。強。悍。な。る。を。憂。へ、尋。常。の。家。に。生。育。し。な。ば、如。何。な。る。禍。を。招。か。ん。も。知。る。可。か。ら。ず、寧。ろ。之。を。僧。徒。に。爲。す。に。如。か。す。と。思。惟。し、晃。山。新。宮。別。當。安。養。院。慈。禪。大。僧。都。に。請。ふ。て。得。度。せ。し。め、五。戒。の。訓。を。受。け。し。め。た。

感 史 識

り。時。に。彼。れ。年。十。七。な。り。き。後。屢。々。江。都。に。往。來。し、錫。を。東。叡。山。に。駐。め、當。時。の。名。僧。知。識。に。從。つ。て。深。く。天。台。の。微。旨。を。探。り、佐。藤。一。齋。翁。の。門。に。就。て。儒。學。を。講。じ。ぬ。此。の。如。く。に。し。て。彼。れ。は。衆。僧。の。間。に。嶄。然。頭。角。を。現。は。し、師。の。彼。れ。を。愛。す。る。愈。々。深。き。を。加。へ、他。僧。は。竊。か。に。將。來。佛。界。の。獅。子。王。を。以。て。目。す。る。に。至。れ。り。彼。れ。は。佛。經。に。潛。心。す。る。の。み。な。ら。ず、孔。孟。の。學。を。も。研。究。す。る。處。あ。り。是。れ。實。に。後。來。彼。を。し。て。勤。王。の。大。義。を。唱。道。し、攘。夷。の。精。神。を。鼓。舞。す。る。に。至。ら。し。め。た。る。緣。因。な。ら。ず。ん。ば。あ。ら。ず。

彼。れ。は。嘉。永。四。年。に。於。て。大。王。の。命。に。よ。り。本。宮。の。上。人。職。と。な。り。ぬ。當。時。社。内。荒。蕪。に。屬。し、徒。ら。に。狐。狸。の。跋。扈。に。委。し。た。り。彼。れ。深。く。之。を。悲。し。み、「此。の。如。き。は。神。靈。を。慰。す。る。所。以。に。あ。ら。ず」と、慨。然。と。し。て。自。か。ら。千。金。を。抛。ち、草。萊。を。拓。き、荆。棘。を。芟。鋤。し、經。營。萬。端、壯。嚴。な。る。社。殿。を。



現出したり。彼れ常に曰く「我國體は實に宇内に冠絶す、國民たるもの勤王愛國の志氣なかる可からず」と、此の如き言は遂に衆僧をして意外に感せしめ、其の才能を妬忌するものは殊更に言を爲して狂僧となし狂人となし、法を亂るものなりと難して、只管彼れを排斥せんと勗めたり。而かも彼れは笑て顧みず、紛々たる毀言を蒼蠅の羽音とも聞かざりし也。

然れども不幸は意外にも彼れをして晃山を退去すべきの己むなき運命に逢著せしめたり。嘉永六年米艦の浦賀に来るや、幕議紛々出るところを知らず、戦を主とするものあり、和を唱ふるものあり、終に其決を晃廟の神籤に取るに決しぬ。是れ實に滑稽の甚しきものにあらずや、苟くも堂々たる六十餘州を統督したる幕閣が、國家の大事に際し、議論の決を探らんが爲め、神籤に問はんとするが如き、

讀 史 感

今日より見るときは殆んどお伽草紙の物語を聞く如き感なくんばあらず、否當時と雖ども、有識の士は其小供らしきを悲しみにき。而して神籤は如何なる斷案を現はせしぞ、曰く和の一字。衆僧は見て以て喜こびぬ、思ひらく是れ神慮の在る處と。彼れは當時淨土院に住職せり、之を聞いて曰く「天下の大事、事輕忽に附す可からず、人心迷疑の時に在ては神籤も亦た逆出することあり。今や天下泰平に慣れ姑息偷安夢にだに戰意なし、是れ神籤に托して士氣を鼓舞作興すべきの時也、何ぞ必らずしも和を喜んで、國家を危局に陥るゝの拙策を探らんや」と。彼れが此一言は平常彼れを嫉忌したる衆僧に讒搆の機を與へぬ。彼等は幕吏と一致して彼を誣告し、晃山を去らざる可からざるに至らしぬたり。彼れは奮然として起ち「今に於て此の如し、幕閣豈に能く天下を制御し得んや、時事知る可し」と叫び、一



僕を従へて破衲飄然。晃山を去りぬ。

彼れは是より何れに往かんとするか、彼れの身は緇流に在るも、彼れの胸懐には天下經綸の策鬱勃たり、而かも猶ほ其分を思ひ、其職を謹しみ、心を雲外に馳するの鴻鶴たらざりしも、今や桑門を出で、天外の孤鶴たり、彼れは其素志なる外夷の事情を知らんことに熱中し、將さに長崎に出で、洋籍の講究に従事せんとし、旅裝已に整備しぬ。時に相馬藩の家臣にして彼れと舊あるもの、其の尋常緇徒の流にあらざるを知り、藩主に勸めて政治の顧問たらんしめんとし、聘を厚うして彼れを招きぬ。彼は其素志の變ず可からざるを主張して應ずることを拒めり。而かも藩主の懇請辭す可からざるものありて遂に相馬藩に來り、無名の執政となり、子弟の教育者となり、地を愛宕山下に相して校堂を興し、大に學術武術を講究しぬ。

彼れ常に曰く「教育とは儒者を製造するの謂にあらず」と。斯の如くにして彼の教育が一藩の子弟を薰陶し、士道を發揮し、元氣を作興したり。

## (下)

曠達なる識と、英俊なる才を有し、尋常の緇流にあらざる彼れは、何が故に相馬の如き小藩の招聘に應じたるか、是れ疑ふ可き事情也。然れども是には大に理由の存する所、彼れ曾て二宮尊徳翁に面し、其經世の談論を聞き、心竊かに其徳の大なるに服し、之を敬慕する久し、而して翁が經營したる神領再興の事業を見るに及んで、益々曠代の偉才に驚き、其經論の一國一郡の治方に止まらずして、天下國家を經緯すべきの良法たるを感得しぬ。相馬は小藩なれども早く



己に此偉人物の教化を受け、藩土再興を行へり、是れ小藩と雖も我  
 才を試むるに足る、何ぞ其大小を問はんと決したるに依る也。  
 彼れの相馬藩に來りてより未だ期年ならざるに、一事件は起れり。  
 そは藩中中士以上の嫡子十數人は、故ありて死を以て論せられんと  
 せり。彼れ之を聞くや、以爲らく士氣を鼓舞せんには、此果斷ある  
 固より已む可からざるも、顧みて天下の形勢を察するときは、大に  
 考慮すべきもの有り。一人の生命が一國に繋るの理を知らば、十數  
 の生命を今日に斷ずる、復た忍びざる所のものあり。之をして自か  
 ら新たにするの道を開かしめんには、他年國家に鴻益ある果して幾  
 何ぞや、之を公に省みる、應に一考すべきの事件也。彼れは直ち  
 に藩主に謁して其志のある處を詳述し、以て十數士の生命を乞ひ受  
 け、伴ひ歸りて諭告する處あり、果然後年奥羽征討の師起るや、其

感 史 讀

順逆の理を明にし、一藩の趨向を誤らざらしめたる人物は、此一團  
 の青年より出でにき。

「世を捨て、身はなきものと思へども、雪のふる日は寒くこそあれ」  
 孤形雲水に寄興したる僧都と雖も、世情に感ずれば忽ち詠嘆を發せ  
 ざるを得ず。況んや世を憂へ、時を傷むの彼れ、争でか燕趙悲歌の  
 士が流れを汲まで止むべき。時勢の切迫を見れば慷慨禁する能はず、  
 將さに都門に遊び、外夷の實情を探知し、以つて處するあらんとし  
 文久年間、窺かに身を托鉢に寄せて、藩境を出で江戸に入りて、暫  
 らく幕閣の處置を探ぐる處ありにき。實に形勢の切迫は想像の外な  
 りき。幕府の失政一日より甚しく、人心離叛、大動亂の機は六十  
 餘州の山河に醞釀しつるに似たり。到底安然として相馬藩に客卿た  
 るは、彼れの抱懷したる主義に合せざるものあるより、相馬藩に歸

感 史 讀



るや、直ちに其志を藩主に達し、子弟に告げ、以て別離の情を叙せんとしたりき。然れども藩主は侍臣をして懇ろに之を止め、子弟は寓舎に就いて永く駐錫せんことを要請せり。彼れ茲に於て藩主と子弟に別るゝに忍びず、忍ぶ能はざるの情を忍びて、暫らく客卿となり、子弟教養に任ずるに決せり。志は決したりと雖ども、其心や常に天涯江都の空に向つて飛びぬ。

やすらひし年も久しき竹の杖

關のあなたの空ぞ悲しき

嗚呼此の一首の國風、如何に彼れが心緒の纏綿たるを告白せしぞ。藩主の知遇子弟の情誼は、到底彼れをして其志す所を行はしむる能はず。「關のあなたの空」は、今や外人の跋扈と、幕府の失政とを以て雲色慘悽たり。

讀

史

感

天。下。の。形。勢。は。一。轉。し。再。轉。し。遂。に。奥。羽。征。討。の。舞。臺。は。開。か。れ。ぬ。奥羽同盟の議は雄藩によりて唱道せられぬ。蓋し當時に在りては、何れの藩を問はず、藩臣中に、勤王と佐幕との二派を生じたり。相馬藩にも亦た此二派ありて、互に其議を闘はしたれども、彼れは勤王の正道にして佐幕の非なるを論じ、遂に藩論をして勤王に一決せしめたり。尋いて九條公の仙臺に至り、各藩の兵を督して會津を討するに當り、彼れは自家教養の子弟を率ゐて戰陣に赴きぬ。是に於て緇衣の僧形は忽ち變じて兵馬の人となり、矢石の間に出入するに至れり。其緇衣を被りて白馬鞍上諸兵を指揮する、宛然神仙の如く、敵兵其奇裝に驚ろき、尋常の將士にあらずとし、相戒めて其鋒を避けぬ。奥羽征討の當時に於ける相馬藩の位置は、實に困難の立場なりき。